

Art × Architecture

Urban Survey Workshop 2023@Tennoz

WASEDA UNIVERSITY

City and Art Seminar

Interdisciplinary Studies of Culture,
School of Culture, Media and Society

and

Members of
Department of Architecture

School of Creative Science and Engineering /
Graduate School of Creative Science and Engineering



美術 × 建築

丸の内まちあるきワークショップ 2023

美術×建築

天王洲・街歩きワークショップ

2023

早稲田大学

文化構想学部 複合文化論系
超域文化プログラム「都市と美術」ゼミ

創造理工学部建築学科
／大学院創造理工学研究科建築学専攻

『観光のまなざし』の観点から天王洲アイルをみる

Looking at Tennoz Isle from the perspective of The Tourist Gaze

プロジェクト概要

このプロジェクトは、ジョン・アーリ著の『観光のまなざし』をもとに、天王洲アイルに関与する人々を4つのグループに分け、それぞれのまなざしについて分析、考察を行ったものである。具体的には、まず個人としてのまなざしと施設としてのまなざしに大別した。その上で、個人としてのまなざしは、①他県や他地域から訪れる観光客などの天王洲アイルの外側からのまなざしと、②天王洲アイルの周辺の住民や天王洲アイルで働く会社員などの天王洲アイルの内側からのまなざしの2つに分けて分析、考察を行った。

また、施設としてのまなざしは、③天王洲アイルエリアを管轄する行政（東京都、品川区）からのまなざしと、④観光地としての天王洲アイルの整備に尽力している寺田倉庫からのまなざしの2つに分けて分析、考察を行った。

その上で、上記の4つのまなざしには交錯や速度間の違いがあることに気づいたため、それらを可視化するために『まなざし地図』として、天王洲アイルエリアで実際にどのような移動や滞留が行われているのかについて、分析や考察を行った。

1, 4つのまなざし

ここからは、先述した4つのまなざしについて、より詳しく見ていく。このようなテーマを設定するに至った背景として、ジョン・アーリ著の『観光のまなざし』の存在がある。私たちの班の方向性としては、『観光のまなざし』を踏まえて、天王洲アイルに関わる人々のまなざし（視点）の違いを把握し、まなざしの交錯の仕方や、新しい視点の可能性について考えていくことにした。

その上で、まずは街頭インタビューなどで調査を行った。天王洲アイルに関わる人々にはどういう人がいて、それぞれどのようなまなざしを持っていて、天王洲アイルという街をどのように考えているのかを知るためだ。結果として、個人としてのまなざしは、①他県や他地域から訪れる観光客などの天王洲アイルの外側からのまなざしと、②天王洲アイルでは働いていたり、周辺に住んでいたりしている人々などの天王洲の内側からのまなざしの2つに分類できると考えた。



(図1) WHAT CAFE 内部



(図2) 天王洲の水辺空間

ず、①外側からのまなざしについては、「アート」に注目して天王洲アイルに訪れていることが判明した。具体的には、WHAT CAFE（図1）を作家と直接会話できる貴重な場所と考え、作家と話すために来る方や、アートインフルエンサーとコラボしたアート展示を見るために地方から来る方などが多くいた。次に、②内側からのまなざしは、①外側からのまなざしとは少し異なり、天王洲アイルのもう一つの特徴である、「水辺」に存在するという点が重要な要素であった。具体的には、水辺の眺めに惹かれて移り住んだ方や、安心して子供を遊ばせることができるため頻繁に来るという住民の方、「水辺と緑」というコンセプトに惹かれてマンションを買った方などがいた。

①外側からのまなざしと、②内側からのまなざしでは、「アート」と「水辺」という形で、注目している点が異なっているが、どちらも天王洲アイルの開発において重要視されている項目であり、天王洲アイルの開発の方向性は、悪くなかったと言える。また、どちらに属する人々も現状の天王洲アイルの環境に満足していることが、我々の予想とは異なった。

ここからは、上記の天王洲アイルが人々を惹きつける要素として挙げられた「アート」と「水辺」について、開発した側のまなざしについて考えていく。まず、③天王洲アイルエリアを管轄する行政（東京都、品川区）からのまなざしとしては、天王洲アイルの特徴である水辺にあるという点を生かす街づくりを行いながら、後述の④寺田倉庫からのまなざしで重視されている「アート」という要素を後押しするような施策がされている。実際に、品川区や東京都港湾局が公表している資料を見ると、天王洲は東京都の水辺景観形成のルールに、天王洲独自のアートに特化したルールを上乗せする形で街づくりの方針がされている。1つ目は、水辺の魅力を生かした街の景観づくりという点である。東京都の「水辺景観形成特別地区」エリアの一部として、良好な水辺景観形成のための制限や基準に従っている。具体的には、広告基準や建築規制を設けて、水辺景観を維持したり、ライトアップも実施して、夜間の景観形成も行ったりしている。

2つ目は天王洲独自のアートの映える街並みづくりという点である。これは1985年に地元の地権者たちによって決められた「アートになる島、ハートのある街」のスローガンから「まち全体がミュージアムのような天王洲アイル」を景観形成の目標としている。これにより、広場や歩道、照明、ベンチなどに個性と品格のあるデザインを施して、都市空間全体の形成をしたり、メイン通りのファサードを工夫することで、アートの映える街並みを形成したりしている（文献1、文献2）。

次に、上でも少し触れたが、④寺田倉庫からのまなざしについて考えてみる。そもそも寺田倉庫とは、1950年に創業し、天王洲アイルに拠点を構える倉庫会社である（文献3）。なぜ倉庫会社が天王洲アイルの開発に乗り出したのか。その背景は、品川駅の再開発によって天王洲の不動産オフィスの空室率が上昇し、街全体の活気がなくなってしまったからである。寺田倉庫はこの課題に取り組み、天王洲アイルを、仕事をするために集まる空間から、人がいて賑わう空間にするための取り組みを行っている。

具体的な取り組みとして、ハード面では既存の倉庫建物をリノベーションし、ブルワリーレストラン（T.Y.HARBOR）や、水上宿泊施設の開設（PETALS TOKYO）（図3）、電線の地中化などを行っている。逆にソフト面では、イベントの開催や行政と連携してパブリックアートも設置している。特に寺田倉庫はアートの領域に注力しており、天王洲アイルを拠点として現代アート市場を拡張することを目標としている。その中で、世界一のアートシティを創造するために保税ギャラリーなどのアートに関する機能を集約したり、日常生活にアートを届けたりする取り組みを行っている（文献4、5）。

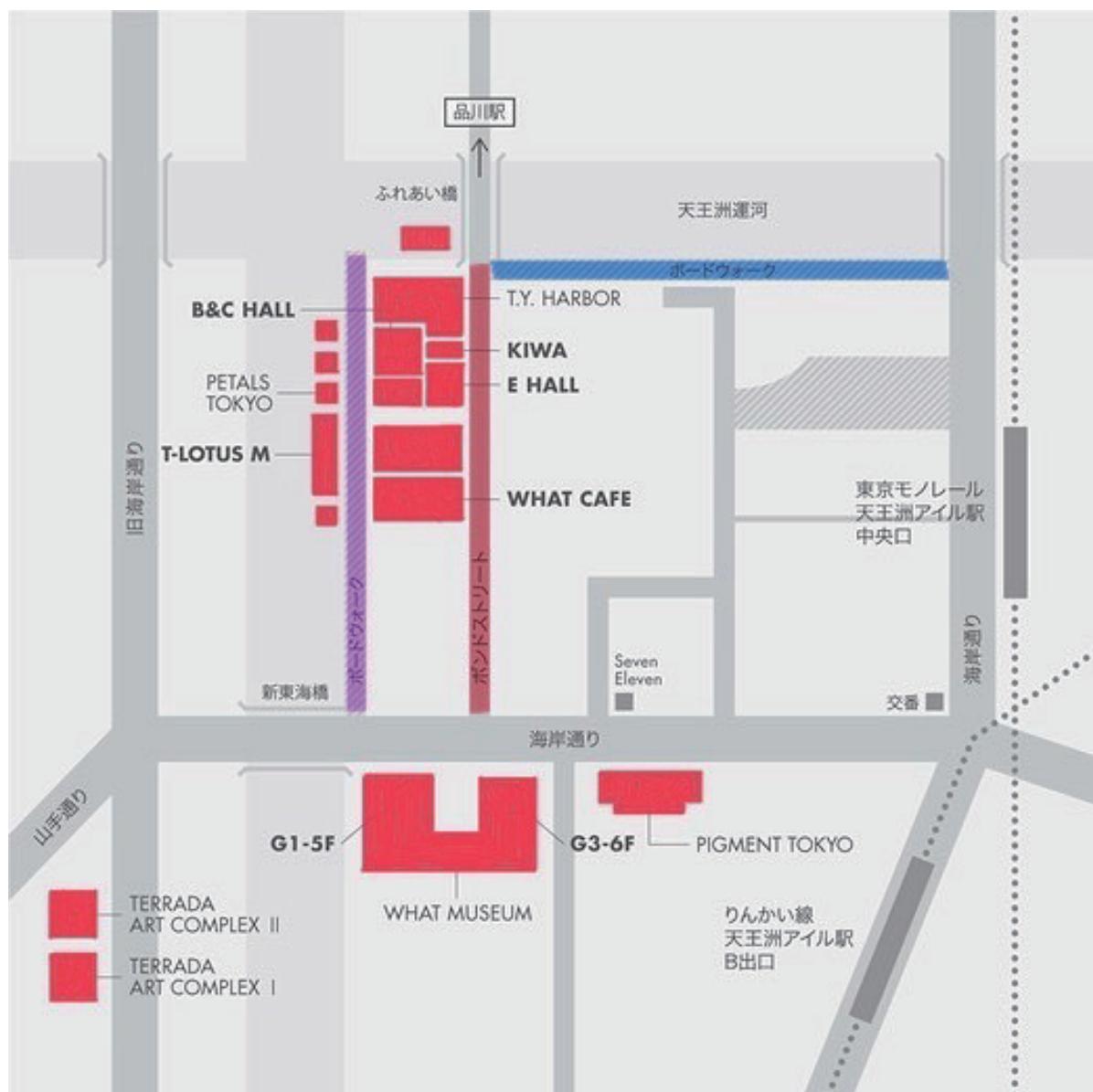


以上のことから、今回分類した4つのまなざし（①（図3）寺田倉庫の開発の一例（PETALS TOKYO）

外側からのまなざしと②内側からのまなざし、③行政からのまなざし、④寺田倉庫からのまなざし)は、それぞれ異なるスケール感、速度感を有していることが分かる一方で、一方がまなざしを向いているところに惹かれたり、それぞれが同じベクトルを向いていたりするところもあることから、相関関係があることも分かる。

2. 「まなざし地図」

4つのまなざしの交錯を踏まえ、そこから生まれる速度感の違いを可視化するため、天王洲の地図の一部を抜粋し人々の滞留が生まれる場所を地図上にまとめた(図4)。本図では人々の滞留が生まれる場所を色で示している。赤で示した部分は、主に寺田倉庫側の働きかけによって生まれたスポットで、特に外側のまなざしを持った人の滞留を生む。青で示した部分は、天王洲が元来持つ土地の性質とそれを活用した行政の取り組みが成されている部分で、特に内側のまなざしをもった人の滞留を生む。そしてその4つが交錯すると考えられる部分を紫で示した。これらの場所がなぜ人々の滞留を生むのかを分析し、3章のまなざしの交錯に関する考察の手掛かりとしたい。



(図4) まなざし地図

まず、寺田倉庫が主体で手掛けている4つのスポットについて分析する。

① PIGMENT TOKYO

PIGMENT TOKYOは、画材の販売も行うが、閉じられた空間ではなく、木の温かみのあるファサードやガラス張りによって歩道から中を伺いやすい空間になっている。専門店であるが、心理的な壁は取り除かれているオープンな空間であるため、人の滞留を生んでいると考えられる。

② WHAT museum

本調査の実施中にWHAT museumでは『ゴッホ・アライブ展』(2024年1月6日-3月31日)の会期中であったため、駅から人がまとまって流れてきていた。展覧会から出てきた人はTERRADA ART COMPLEXやボンドストリートへ流れていく。アートを目的に外から天王洲に来る人の中心地になっており、展示が滞留を生んでいると言える。

③ TERRADA ART COMPLEX

新東海橋を渡った先にある、TERRADA ART COMPLEXでは、ギャラリー観覧後にゆったり時間を過ごせる様に、カフェやテーブルが設置されている。ギャラリー内に入らなくても、簡単に利用ができる。

一方、近くで働く人のために、お弁当の販売も行っている。つまり、TERRADA ART COMPLEXは異なる種類の滞留を生み、2つの速度感が同居しているといえるだろう。



(図5) PIGMENT TOKYO



(図6) WHAT museum



(図7) TERRADA ART COMPLEX



(図8) ボードウォーク

④ボードウォーク (T-LOTUS M周辺)

天王洲の西側のボードウォークには、板張りで整備された遊歩道に水辺と接するように並べられたイス・テーブルがあり、運河へのまなざしを誘導する滞留空間になっている。

また、近隣住民の散歩コースかつ、観光客も休憩に訪れている。このように、寺田倉庫が運営する周辺の施設と水辺景観を活かすための環境づくりが交錯することで相乗効果が生まれている。

⑤ ボードウォーク (品川駅側)

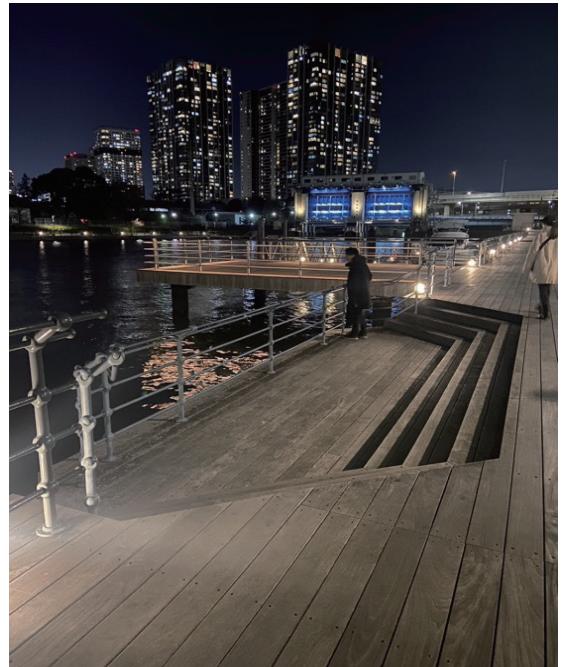
北側の運河沿いのボードウォークは、運河を挟んで品川のビル群を臨む立地ながら、ボードウォークと運河の水の距離はかなり近く、都会とは思えない情緒が感じられ、滞留が生まれている。

また、犬を連れて散歩することができるため、天王洲以外の品川区民の散歩コースになり、天王洲に訪れるきっかけともなっている。

⑥ Bond street

幹線から一步横に入ったボンドストリートは幅広の道路が歩行者の速度感を緩めている。また、カフェやレストランが密集しているため、アート目的のゆったり過ごしたい人とランチに出かけるビジネスマンがいる。

ここでも異なる速度感が同居し、異なる種類の滞留が生まれている。



(図9) ボードウォーク

以上の「まなざし地図」で示した滞留スポット以外にも、天王洲地区東側の遊歩道も今後より多くの人々の滞留を生むポテンシャルを秘めているだろう。付近にはビルが集まっており、観光客が訪れる動線上にある場所ではないが、

住民やオフィスワーカーなど「内側」の人が集まる場所となっている。この場所は、純粋な行政のまなざしのみが感じられるスポットと言え、静かで快適であるが「天王洲らしさ」の解像度は低い。

また、滞留とは人々の移動の速度が緩やかになることを含んでいるが、その速度を決める要素として地面の質感を挙げたい。例えば、大通りと運河を繋ぐ道は単なるアスファルトではなく、石畳となっており、ここを歩く人々の速度はゆったりとしている。また、2種類の道が並行している場所もある（図10）。運河側の道はボードウォークの板張りの床になっており、視覚的にも足で歩く感触的にも、都会の環境の中では非日常的な要素として機能しており、ゆったりとした速度で歩くことが期待されている。その一方で、ビル側の道はオフィス街を象徴するかのようなコンクリートとタイルで舗装された道となっており、人々は通常通りの速度で歩いていく。



（図10）並行した2種類の道

3. 考察

寺田倉庫と行政のまなざし

2章までで、「まなざし地図」の作成を通して、なぜその場所に人々の滞留が生まれるのかを考察し、それがどのようなまなざしに起因するものなのか、またどのようなまなざしを惹きつけるのかを分析した。そこから浮かび上がった状況を整理すると、大きくわけて行政はボードウォーク側に代表される水辺空間（ウッドデッキや様々な種類のベンチ等）を、寺田倉庫はアート関連施設やボンドストリートの設備等を通して、人々の滞留を期待していることがわかった。しかし、両者が分離しているわけではない。例えば、天王洲北西部のボードウォークは、寺田倉庫の施設と水辺空間のシナジーが発生するエリアとなっており、天王洲を象徴する空間形成が成されていると言えるだろう。

西北部に集中した施設

先述のように、行政と寺田倉庫のまなざしが融合することこそが、「天王洲アイル」のイメージを醸し出している。そこで今後の課題として挙げられるのは「天王洲アイル」としての一体感を出すために、二つのまなざしを融合して南側を開発することである。現在は、天王洲アイル駅を起点として、北西部の活性化が進んでいる一方で、南側には

公園等の公共施設や水辺空間があるにもかかわらず、あまり外部の人々が訪れる動機づけになるような施設や取り組みは見受けられない。このエリアの開発が官民の連携のもとで「水辺×アート」をテーマに進めば、より一層天王洲独自の特色を活かした空間を広げることができ、活性化に繋がると考える。

結論

これまでの分析や、地図上の青、赤、紫の表示が混在することから、天王洲を訪れる人々が一つだけのまなざしで動くことになるとは一概には言えない。つまり特定の目的を持ってその場所に向かっていても、途中で他のまなざし用意した要素にも遭遇することになる。天王洲にまつわるまなざしは互いに影響し合っていると結論づけられる。

【参考文献】

(文献 1) 品川区.“天王洲地区景観まちづくりルール アイデアブック”.品川区景観計画.
<https://www.city.shinagawa.tokyo.jp/contentshozon2019/ideabook.pdf>, (参照 2024-03-18)

(文献 2) 東京都港湾局 (2018).“運河エリアライトアップ・マスター・プランについて”.東京都港湾局.
<https://www.kouwan.metro.tokyo.lg.jp/yakuwari/ungalump.html>, (参照 2024-03-18)

(文献 3) 株式会社リクルート ブログ なぜ寺田倉庫は文化を興し、街をつくるのか——創業 68 年の企業が迎えた変革期
https://www.reruit.co.jp/blog/guesttalk/20190314_370.html

(文献 4) INDUSTRY CO-CREATION(2021).“「世界一のアートシティをめざして」寺田倉庫が取り組む天王洲の街づくり”.
<https://industry-co-creation.com/industry-trend/69507>, (参照 2024-03-18)

(文献 5) 事業構想 (2022).“寺田倉庫のアート事業 アートのまち天王洲で国内外をつなぐ”.<https://www.projectdesign.jp/articles/2cbccb80-5c1f-42e4-85f9-7b667a0b19c7>, (参照 2024-03-18)

【図表の出典】

(図 1) 執筆者 (キム・ミンヒョク) 撮影

(図 2) 執筆者 (石川航士朗) 撮影

(図 3) 執筆者 (渕上優衣) 撮影

(図 4) 執筆者 (鈴木紫音) 作成 参考：<https://www.bunkatsushin.com/varieties/article.aspx?id=3463>

(図 5) 執筆者 (中田光) 撮影

(図 6) 執筆者 (中田光) 撮影

(図 7) 執筆者 (中田光) 撮影

(図 8) 執筆者 (渕上優衣) 撮影

(図 9) 執筆者 (渕上優衣) 撮影

(図 10) 執筆者 (渕上優衣) 撮影

【執筆者】

1. 加藤祐弥 Yuya Kato (文化構想 4 年)
2. 鈴木紫音 Shion Suzuki (文化構想 4 年)
3. キム・ミンヒョク Kim Minhyeok (文化構想 3 年)
4. 島田悠 Yu Shimada (文化構想 3 年)
5. 渕上優衣 Yui Fuchikami (文化構想 3 年)
6. 中田光 Hikaru Nakada (文化構想 4 年)
7. 川内俊太郎 Syuntaro Kawauchi (創造理工修士 1 年)
8. 石川航士朗 Koshiro Ishikawa (創造理工修士 1 年)

天王洲に必要なベンチ

Benches required at Tennozu Isle

プロジェクト概要

本プロジェクトは、現在の天王洲アイルに求められる新しいスタイルのベンチの提案を目的としている。

アートや運河を中心とした水辺空間が特徴であるこの街は、住む人、訪れる人が屋外で過ごすことが多いだろう。そのような背景から、この街において、屋外空間を充実させるベンチは大きな役割を果たすと考えられる。そこで、私たちは、実際に天王洲アイルに足を運び、街歩きをした上で、ベンチの置かれ方、使われ方の観察や各ベンチの計測を行った。観察・計測結果を下に、ベンチが多く置かれているエリアを2つを抽出し、各々のエリアに設置されているベンチについて分析を行った。分析結果から、この街における良いベンチと悪いベンチを考察した。加えて、天王洲アイルの歴史や街づくりの方針・課題を調査することで、天王洲アイルに求められる、あるいは、今以上に街の魅力を向上させるベンチのあり方を洗い出した。これらを下に、新たな天王洲アイルでの過ごし方を見出すベンチを提案していく。

1. 天王洲アイルベンチの現状

天王洲アイルのベンチの現状調査にあたって、実際に街を歩き、観察・計測を行った。街をさらにエリアごとに分け、観察結果は以下の通りである。①天王洲アイル駅から PIGMENT TOKYO にかけたエリア：ベンチ数 15 個・腰掛可能人数 21 人②Yamate Street エリア：ベンチ数 3 個・腰掛可能人数 7 人③Bond Street エリア：ベンチ数 3 提案・腰掛可能人数約 7 人（喫煙所のベンチを含む）④Bord Walk エリア：ベンチ数 10 個・腰掛可能人数推定 32 人⑤Green Square から Sphere Garden にかけたエリア：ベンチ数 13 個・腰掛可能人数推定 40 人⑥NAGI Patio エリア：ベンチ数 17 個・腰掛可能人数最低 257 人。これらの観察の結果より、2つの地域にベンチが集中していることが判明した。1つ目は④ Bord Walk エリアにあたる北側地域、2つ目は⑤ Green Square から Sphere Garden にかけたエリアと⑥ NAGI Patio エリアにわたる東側地域である。

ここから、2つの地域に設置されているベンチについて、各々分析を進めていく。1つ目の北側地域、エリア自体の大きな特徴は、運河沿いであるということだ。ベンチに座ると自然と運河が眺められるよう、運河と平行にベンチがいくつも置かれている。また、エリア近くには賑わっている飲食店があり、そこで買った食べ物や飲み物をベンチに座って、食べたり飲んだりしている人が数名見受けられた。そして、このエリアのベンチにおける最大の特徴は、ベンチの大きさや角度が一つ一つ異なる点である。ベンチに使われている素材や元となる形状は全て共通しており、その小さな違いが目に留まる。具体的には、ベンチの横幅、背もたれと座面の角度、座面と足の置き場の角度がそれぞれ異なっている。ベビーカーでの利用者や小さな子供のベンチ利用が見受けられたのは、これらの工夫によるのではないだろうか。

以上の分析をまとめると、ベンチの目的①正面の運河の鑑賞②近隣店舗の持ち帰り飲食をしやすくする③多様な人や年齢層が利用を可能にするという3つの特色が見えてきた。観察においてこのエリアは絶えず、ベンチ利用者がいた。このことから、ベンチにおいて、景色を含めた視覚的に快適な空間の確保や多様な利用者を想定した設計は重要視すべきであると考えた。

2つ目の東側地域のエリア自体の特徴として、中庭、パティオといった公園的空間であることがあげられる。しかし、周囲には高層ビルが立ち並んでおり、結果的に、視覚的快適性は低いと考えた。

ベンチの形状は、比較的大規模であり、アーティスティックで意匠の凝ったデザインが多く見られた。アートの展示を意識したような面白い空間である一方、ベンチとしての機能性は低いと感じた。観察した際も、実際に使用している人はほとんどおらず、実用的なベンチではないと言えるだろう。

「悪いベンチ」と捉えられるこのエリアのベンチの課題点をまとめると、①景色といった視覚的に楽しめる空間がないこと②機能性・実用性が低いということ③アート空間としても中途半端であることの3点であるだろう。

天王洲アイルの象徴でもあるアートをベンチに組み込むことは、街らしさを際立たせる手段として有効ではあると考えられる。しかし、空間テーマをアートに寄せすぎるあまり、ベンチとしての役割を果たせなくては意味がない。ベンチの設置意図が読み取れる空間設計は必要不可欠であると考えた。

2. 天王洲の変遷

天王洲は現在、本来「街」が持つべき人間的な暖かさ・文化を復興し、他にはない独自の風景を演出して行くことを目指して、まちづくりのスローガン「アートになる島、ハートのある街」を掲げて、様々な整備に取り組んできている。

元来、天王洲はこうしたテーマでの開発が行われてきた訳ではない。以下は天王洲における、計画から現在に至る、開発の変遷を時代区分ごとにまとめること（山村 2020）。

①第一期（1985-1997）オフィスビルの建設ラッシュ

1985年から1997年の期間は、地権者の団体の自主的連絡先である「街づくり懇親会」による街づくり大綱と基本計画のもと開発が行われた。民間主導のウォーターフロント開発であり、従来倉庫街であった東品川2丁目地区において地区計画を決定することで、パブリックスペース広がるオフィス街へと変貌させた。

*参考

- ・1985：天王洲総合開発協議会設立
- ・1986：マスターplan策定
- ・1988：地区計画が都市計画決定



(図1) 天王洲全域図

- ・1991：「東京 MI ビル」「地域冷暖房プラント」竣工
- ・1996：「JAL ビルディング（野村不動産ビル）」竣工

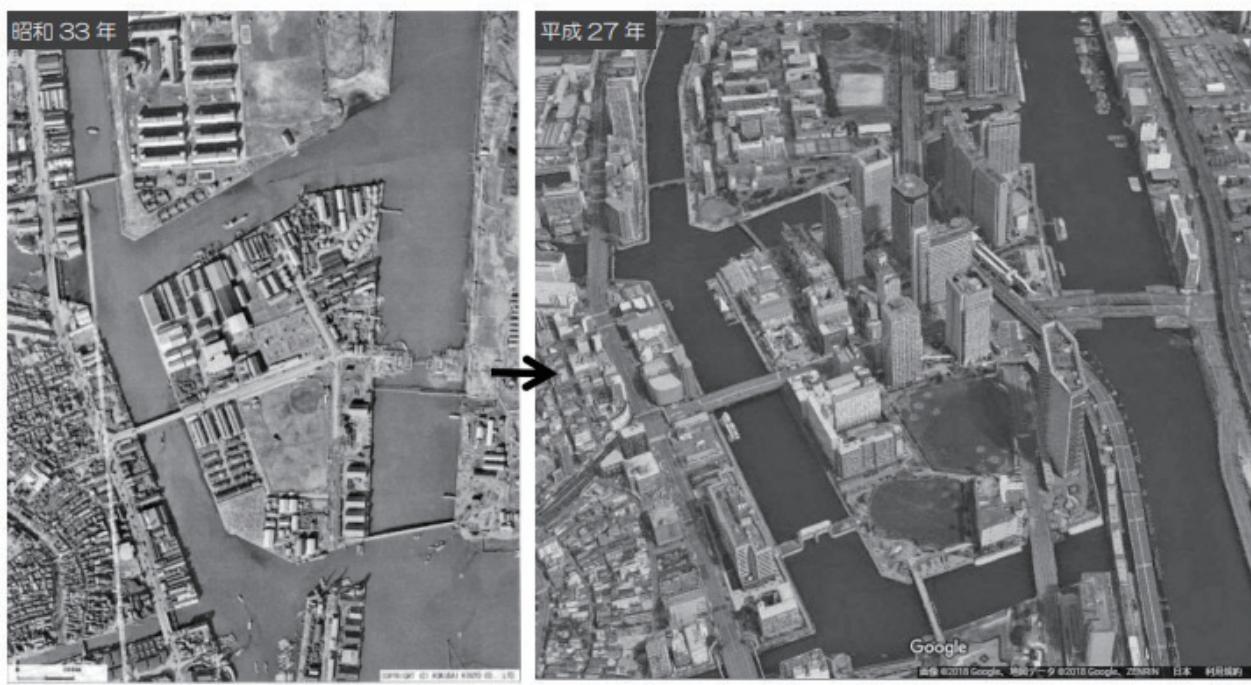
②第二期（1998-2007）豊かな水辺空間の形成

この時期から、寺田倉庫主導の「ボンドストリート」を中心とする低層エリアのまちづくりがはじまった。1997年に寺田倉庫がT.Y.HARBORを開業する。以降、T.Y.HARBORを震源として、水辺のアメニティに着目したまちづくりが進展した。2006年に水上レストランが開業するなど、ユニークな水辺空間が整備されていった。

③第三期（2008-）小規模継続的整備の加速

寺田倉庫による「現代アート」をテーマとした低層まちづくりが進展する。「ボンドストリート」を始めとし、通りに親しみ深い名称をつけるなど、地域の磁力を高める施策が施されている。

◆天王洲地区のまちの変化



（出典）品川区 天王洲地区景観まちづくりルールアイデアブック

3. 天王洲に求められるベンチ

ここまで分析から、天王洲に求められるベンチは以下3つの要素を満たしているものであるとした。

- ①景色を含めた視覚的に快適な空間の確保、多様な利用者を想定した設計がされているもの。
- ②空間テーマをアートに寄せすぎることなく、ベンチの設置意図が読み取れるもの。
- ③アートの街「天王洲アイル」を象徴する空間を形成するもの。

ベンチを提案をするにあたり、天王洲の中でも2つのエリアを選定した。Board WalkとYamate Streetである。Board Walkは天王洲を代表しつつも、アートとしての機能が果たされていないことから改善の余地があると考えた。Yamate Streetは寺田倉庫の前にあり、歩道が広いにもかかわらず、現状空間の有効活用がされていないかつ、天王洲の中心であり、周辺に美術館、ボンドストリートなどポテンシャルの高い地域であることから選定した。

4. 提案①

はじめにボードウォークに設置するベンチを提案する。一つ目は、今現在あるベンチを活かすものだ。これまでの調査の結果、天王洲の象徴であるボードウォークにアート的要素が少ないという問題点が判明した。そこで、現在ボードウォークにある特徴的なベンチとアートを結びつける方法を考えた結果、キャナルアートをテーマとした、運河の景観鑑賞に加えてアートを活用した景観施策を実施することが有用であると結論に至った。具体的には、床や対岸にウォールアート、プロジェクションマッピング（図2）が考えられる。ボードウォークのベンチはスペースが区切られており、ゆっくり鑑賞することができるだろう。また、今あるベンチに加えて使い方に応じて配置を変えられるベンチを設置することも「アートの街・天王洲」の魅力向上に繋がるだろう。

図3で示したようなベンチはソシオペタル配置に変更でき、水平に配置すると、運河を鑑賞する個人利用も可能となる。これにより、パーソナルスペースが確保されているベンチがおおく、知識産業に必要な交流が図られにくいう、これまでの問題点が解決できるのではないだろうか。



一般社団法人中川運河キャナルアート

（図2）中川運河キャナルアート



（図3）使い方に応じて配置を変えられるベンチ

5. 提案②

続いては、Yamate Street に置くベンチを提案する。現状の Yamate Street に設定されているベンチには大きく 2 つの問題点がある。まず、一つ目はこの道路は寺田倉庫に面しており歩道が広いにもかかわらず、空間の有効活用がされていないことだ。そして、2 つ目は空間テーマがアートに寄りすぎているため、ベンチの設置意図が読み取りづらくなっていることだ。そこで、「鑑賞を終えた人が一休みをして感想を共有できるほっと一息つける場所」をテーマとして、新たなベンチを提案する。提案するに際して、実際に宮崎市の駅前に設置されたベンチを参考にした。

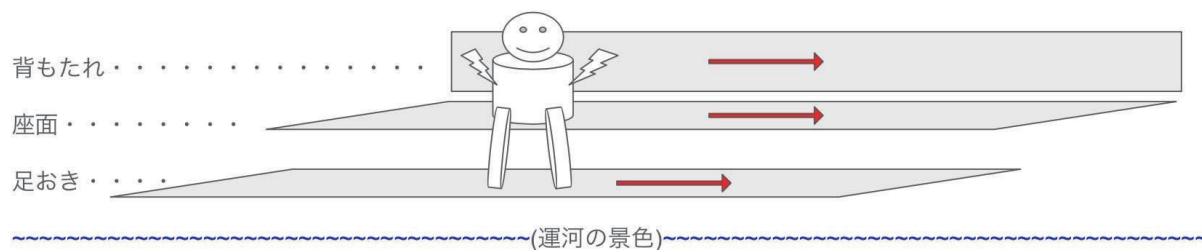


(図 4) 宮崎市の駅前に設置されたベンチ

このベンチは、ソシオペタルな座席配置で、複数人がかけられ人の交流が活発になるように促されていることや、実用的かつ温もりを感じる木製であるということ、また、広い道路を存分に活かすことができる設計になっておりスペースが区切られていることでお子様連れの方でもゆっくり休みやすい等の特徴を備えている。このベンチの特徴に加えペイントをすることによって天王洲アイルというアートの街らしさを出すことができればより地域の活性化にもつなぐことができると考える。

6. 提案③

北東エリアの運河沿いボードウォークに設置するベンチとして、ベルトコンベアを用いたベンチを提案する。このベンチは、移りゆく景色とともに、人と会話しながら座ることのできるベンチを目指すものだ。ベンチは全長 150m ほどの 3 本のベルトコンベアでできている。3 本はそれぞれ背もたれ、座面、足おき（動く地面）の役割を持ち、同時に一方向に動く（図 5 参照）。端から端までを 30 分かけて座りながら移動する。移動時間を 30 分とした理由は、会話しながらの軽食にも十分な時間の長さだからである。このベンチの特徴や見込まれる効果は次の通りだ。まず、座っている場所が常に動くことにより、目の前の景色が変化する。このことにより、変化を楽しめる会話の楽しいベンチになるだろう。このベンチは稼働中には最長でも 30 分経てば端に来るため、ベンチで長時間寝ることを防ぐことのできる排除アートともなる。利用者は 30 分経った後、天王洲の別のエリアを散策し、これは地域の賑わいに繋がるだろう。安全性の課題を解決しつつ、ベルトにアートを描いたり、ベルトの素材を特色あるもの（人工芝など）にしたりと、工夫することにより、利用客の楽しめるベンチができるだろう。

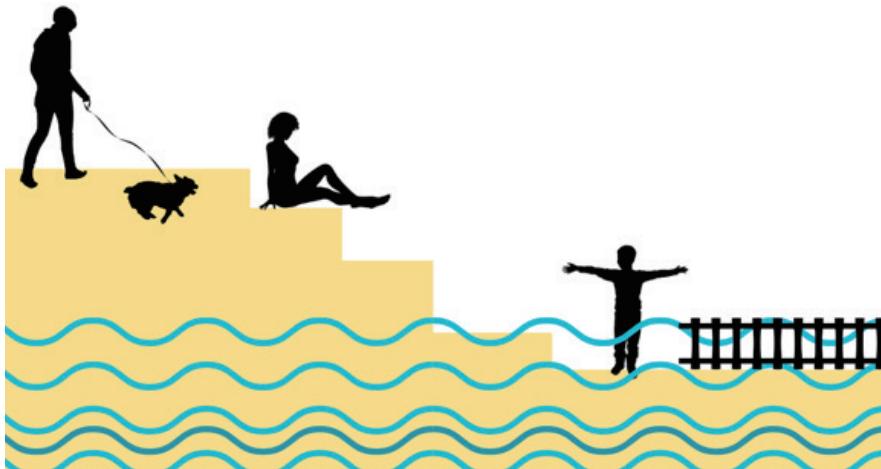


(図 5) ベルトコンベアを用いたベンチ

7. 提案④

最後に対象を絞った空間づくりを提案する。夜8時ごろの天王洲を訪れた際、天王洲に帰ってくる人たちが多いということに気づいた。そこで対象を観光客ではなく、近隣住民かつ子連れの世帯に絞ることにした。テーマは『子供が水に触れあえる空間』。

現在のボードウォークは柵があり水に触れられる場所はないが、柵をなくし、階段状にする。詳細は図2を参照してもらいたい。水のある部分まで降りられるようにし、子供でも遊ぶことのできるように浅めに水面を設定する。そして保護者は子供が遊んでいる様子を見守るように階段に座ることで、階段もベンチの要素を持つことになる。子供が遊ぶ様子は一つの景色、つまり人景観となるため、それを見るためにさらに人が集まる。こうした和やかな空間を形成することで、天王洲に一体感が生まれ、近隣住民にとって居心地の良い空間になるとを考えた。また、天王洲の開発コンセプトである「人間性の知性と創造性に働きかける環境づくり」にも貢献できるものとなっている。



(図6) 階段状の親水空間整備イメージ

8.まとめ

今回我々の班は街歩きを行って天王洲の各エリアにおける問題点から、その場所をよりよくするベンチを提案した。ボードウォークで三つの提案をしたように、異なる視点でいくつかの提案を行うことで、天王洲における多くの可能性がある事を提示した。また、今回のワークショップを通し、街づくりにおいてベンチは不可欠な存在であることを再認識した。これからもベンチと街づくりの関係性について調査していきたい。

【参考文献】

- (文献1) 品川区、品川区景観計画【重点地区・天王洲地区】天王洲地区景観まちづくりルールアイデアブック、2019
- (文献2) 山村 崇、・後藤 春彦・田島 靖崇、都心外の業務市街地における民間企業主導による小規模継続的整備を通したエリア価値の再構築—東京都品川区天王洲地区を対象として—、2020
- (文献3) 社会包括イニシアチブ HP 10 禁止の形は美しくないです。
- (文献4) 天王洲アイル地域情報サイト (最終閲覧日: 2024.03.19)
<https://www.e-tennoz.com/whatstennoz/history.html>
- (文献5) 鴨川市 鴨川ウォールアート (最終閲覧日: 2024.03.19)
<https://www.city.kamogawa.lg.jp/site/kamogawa-kanko/9715.html>

(文献 6) シブヤ経済新聞 使い方に応じて配置を変えられるベンチを備える (最終閲覧日 : 2024.03.19)

<https://www.shibukei.com/photoflash/14612/>

(文献 7) 中央区水辺環境の活用構想

<https://www.city.chuo.lg.jp/documents/14502/mizubekatuyou.pdf>

【図表の出典】

図 1 <https://canalside.or.jp/wp/wp-content/uploads/2023/03/TENNOZARTMAP2023.pdf> (最終閲覧日 : 2024.03.19)

執筆者 (閔口真央) 作成

図 2 HIROBA! 「“感性を育むまちづくり”への強い想いが、中川運河に光を灯す。【中川運河キャラルアート 藤田正彦さん】」

<https://hiroba-magazine.com/tokai-movement/shikakenin-161013/> (最終閲覧日 : 2024.03.19)

図 3 シブヤ経済新聞「使い方に応じて配置を変えられるベンチを備える」

<https://www.shibukei.com/photoflash/14612/> (最終閲覧日 : 2024.03.19)

図 5 執筆者 (伊藤駿) 作成

図 2 <https://www.city.chuo.lg.jp/documents/14502/mizubekatuyou.pdf> (最終閲覧日 : 2024.03.19)

https://www.the-miyanichi.co.jp/horou/_50672.html (最終閲覧日 : 2023 年 12 月 12 日)

【執筆者】

1. 北川 嵩晟 (都立大 都市政策修士 1 年)
2. 伊藤 駿 Shun Ito (文化構想 4 年)
3. 遠藤 加奈子 Kanako Endo (文化構想 4 年)
4. 閔口 真央 Mahiro Sekiguchi (文化構想 4 年)
5. 東出 光貴 Kouki Higashide (文化構想 3 年)

天王洲を表記する実験的な地図をつくる

Creating an experimental map expressing Tennoz Isle

プロジェクト概要

本グループでは、「天王洲を表記する実験的な地図をつくる」をテーマに、調査対象の位置情報を記号化して表記する一般的な地図の作成方法とは異なるアプローチで地図を作成することを試みた。具体的には、我々調査者の視覚や聴覚などの感覚情報を含めて、視覚化された地図を作成することを目標とした。このような背景のもと、当初は天王洲の運河に着目し、水面を感じる範囲（水面の視認範囲や水音が聞こえる範囲）の表記や、水を想起させる物体などのマッピングを行い、天王洲を訪れる人々と水の「親水性」を表す地図の作成を試みた。しかし、親水性を感じるものは水に近い部分に集中し、予想を上回る結果ではなかったこと、また水を想起させるものが少なく、それだけでは地図にするために十分な情報を得ることが出来なかった。そこで、天王洲を構成する大きな特徴である「アート」や「ベンチ」などにも着目し、アートが視覚に入る範囲や、ベンチを地図上に表記した。調査を進める中で、これら「水辺」や「アート」といった要素が天王洲を訪れる人々にとって、人を惹きつける魅力、つまり「引力」として作用していると捉え、ベンチの位置と水辺とアートの関係について考察した。今回の調査で、「水辺とパブリックアートが見える範囲」と「街に点在するベンチ」が地図に表記され、「モノではなく、場所の力を可視化する」地図が完成したと言えるだろう。

1. 構想

天王洲の特徴が伝わりながらも、位置情報を記しただけの地図とは異なる地図を作成するためにはどの様な材料が必要かを探るために、運河、ボードウォーク、パブリックアート、ベンチ、倉庫、植物、音などの天王洲にまつわる情報を得るために複数回の調査を行った。これらの情報を地図にする際に、どの様な要素の組み合わせで出来た地図が最も効果的に天王洲らしさを表現出来る地図になるのかを試行錯誤し、地図に落とし込む要素を選定した。結果として、水面とパブリックアート、ベンチの要素を選択し、水面やアートが視認できる範囲と形状ごとに分類されたベンチの位置を地図上に表した。実験的な地図の作成に留まらず、水面とアートが視認できる範囲とベンチとの関係が視覚的に明らかになった地図から、それらが天王洲での体験にどの様な影響を及ぼしているのかを考察した。

2. 調査

2- 1. 調査目的

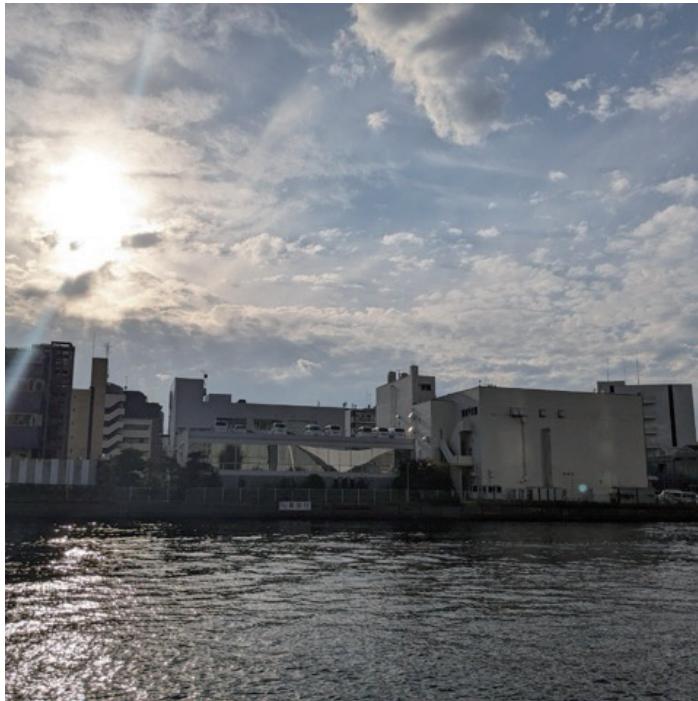
天王洲を構成するどのような要素が、どのように人々を引き付けているのか、天王洲が持つ諸要素をマッピングすることで、天王洲という場所の持つ力の可視化を目指す。

2- 2. 調査方法

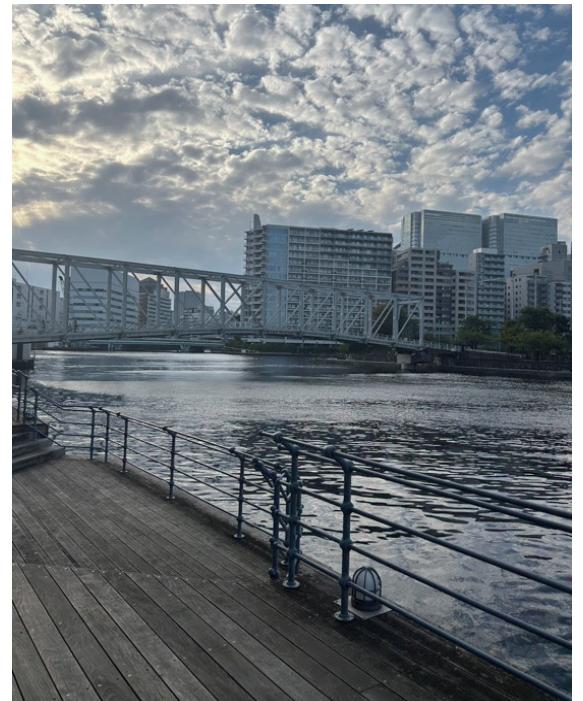
天王洲が持つ諸要素を選定し、選定したそれぞれの要素について実地調査を行う。この際、天王洲の要素として「水辺」・「アート」・「ベンチ」の3つに着目し、首都高1号線から都道317号線に挟まれた地域を対象の調査区域とする。

(水辺)

調査区域での実地調査を行い、水面が見える視界の範囲を記録する。天王洲の内側からは水の要素を感じ取りづらいため主に外側（ボードウォーク等 図1、2）から測定を行う。その際、水辺から直線上に離れ、水面の見えなくなった地点から水辺までの距離を測りマップ上に記録することで水面が見える視界の範囲を測定する。



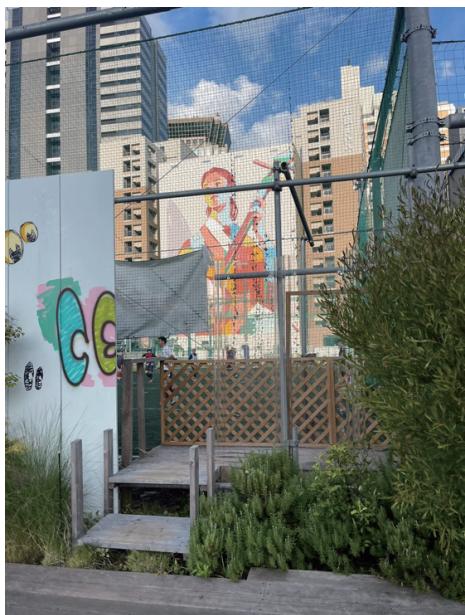
(図1)



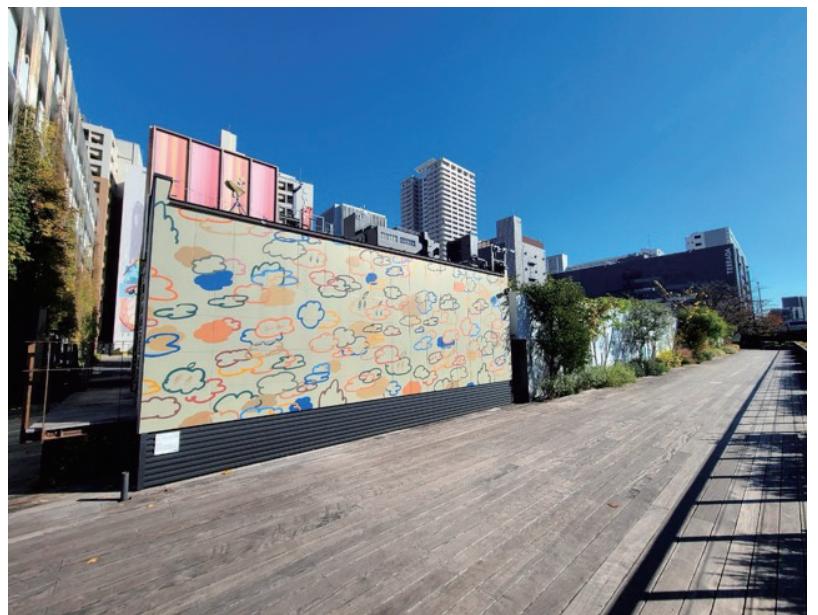
(図2)

(アート)

まず天王洲内にあるパブリックアート等のアート作品（図3、4）を調べ、それらの位置をマップ上に記録する。各アートがあるポイント周辺を歩き、異なる角度・道から視界上に作品があるかを調べ測定する。測定については水辺の調査と同じく、アート作品から見えなくなる位置までの距離を測り、マップ上に記録することでアートが見える範囲を測る。



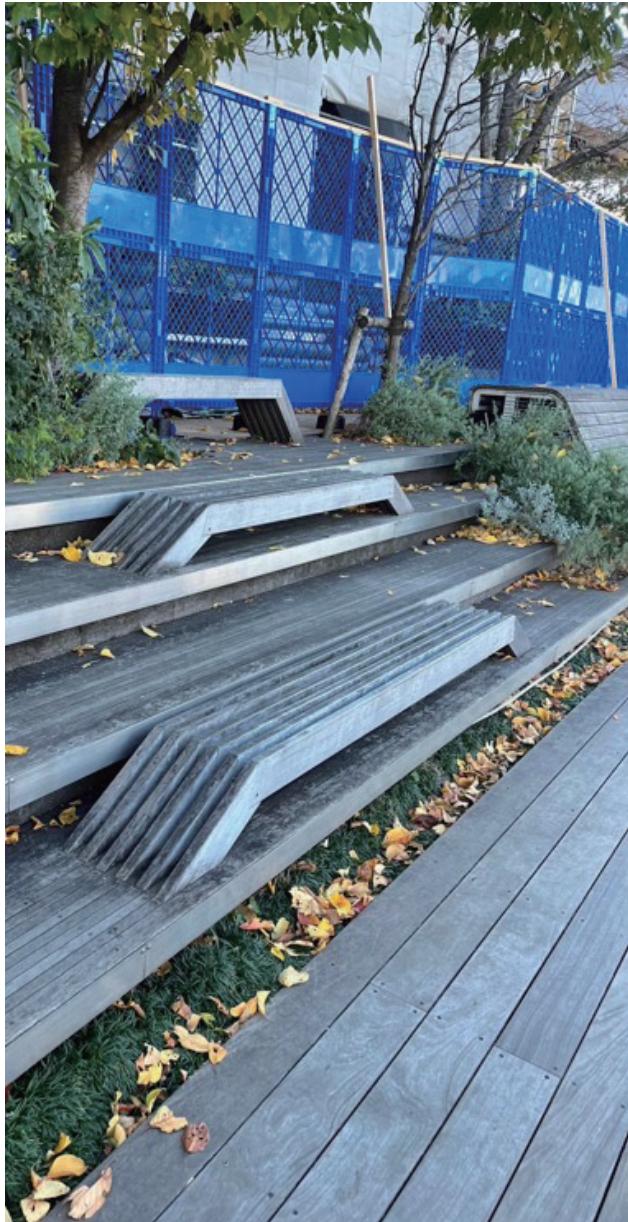
(図3)



(図4)

(ベンチ)

ボードウォーク等水辺や天王洲の内側を通るボンドストリート、センターストリートから調査を行い、調査区域内にあるビルや飲食店周辺についても調査する。その際、ベンチの個数や形についても正確に計り、それぞれマップ上に位置を記録する。(図 5, 6)



(図 5)



(図 6)

2- 3. 分析

水辺、アート、そしてベンチについて行った調査から天王洲におけるそれぞの特徴を分析する。

(水辺)

天王洲は埋立地であることから、水辺と陸地の境界がはっきりしていることが地図から分かる。しかし、高さのあ

る建物が連なるようにして立っていること、水辺に面している陸地が盛り上がっていることから、天王洲の内側からは水面を見ることができない。よって、図7のように実際に水面が見える範囲は限定的となっている。



(図7)

(アート)

水辺が見える範囲とは対照的に、天王洲に存在するパブリックアートの多くは街の全体に配置されていることが確認できる。

特に、天王洲の道に沿ってアートが点在していて、その中でもメインストリートであるボンドストリートと水辺沿いに比較的大きく目立つ作品が配置されていることが分かった。

パブリックアートの配置場所については、現地調査に加えて天王洲のHPも参考にした（注1）。



(図8)

(ベンチ)

ベンチに関しては、調査対象区域に広く点在していることが確認できた。特に飲食店が立ち並ぶ水辺付近や内陸部の飲食店街の近くにはベンチが数多く設置されている。しかしながら、メインのストリートであるボンドストリートにはベンチが配置されていない。

また、水辺に面した通りのベンチは、座る人の視界が水に向かうように一方向に並んでいるが、内陸部には円形のベンチが見られた。水を見るため・休むためと場所や用途に応じてベンチの形が異なっていることが分かる。

今回はベンチの向きやそれによって変化する目線については省略し、位置関係のみに注目する。

3. 「引力地図」

本稿の目的は、「天王洲」の特徴を地図で表現することである。しかし、多くの人が連想する天王洲らしさとは何だろうか。天王洲には多くのパブリックアートとベンチが存在する。これらは、天王洲を訪れる人々の目を惹きつける要素として街に溶け込んでいる。よって、今回の地図プロジェクトではモノ自体ではなく、場所の力を可視化することを目的とする。

〈地図作成の方針〉

集計データから以下の1～3の地図を作成し、重ね合わせた地図4を作成する。

3- 1 地図1

可視水マップ(=水辺が見える視界の範囲)：水の見える範囲を水色で表現した。

3- 2 地図2

アートマップ(=アートが見える視界の範囲)：さまざまな地点から見えるアートの個数に応じて、グラデーションで表現した。

例 (薄い赤)1つ見える → 2つ見える → 3つ見える(濃い赤)

3- 3 地図3

ベンチマップ(=ベンチの形状と個数)：調査より、ベンチの形状と個数を実際より大きく表現し、地図に落とし込んだ。

3- 4 地図4

天王洲の水辺とアートとベンチの相互関係による引力マップ(=地図1～3の重ね合わせ)：それぞれのマップを重ね合わせる。



(地図1)



(地図2)



(地図3)



(地図 4) 天王洲の水辺とアートとベンチの相互関係による引力マップ

4. 考察と展望

完成した「天王洲の水辺とアートとベンチの相互関係による引力マップ」(地図 4)から、水が見える範囲(水辺の引力)は外側、アートが見える範囲(アートの引力)は内側に集中していることが見て取れる。この様な要素の配置から「水・アート・ベンチを戦略的な配置に設置し、天王洲の二面性を魅せる」という街の設計側の意図が存在するのではないかと考えた。この考察に関して、講評会では「街の設計には複数の企業や行政が関わっているため、明確な1つの戦略のもとに水・アート・ベンチの配置がされているとは限らない」という趣旨のコメントを頂いた。このことから、天王洲の街づくりに際して1つの戦略があったとは言わないまでも、天王洲をパブリックアートと水辺という点に特徴付けようとする意識が各々の関係者に有った可能性が有ると述べることは出来るのではないだろうか。また、完成した地図から、ベンチは水が見える範囲とアートが見える範囲の両方に設置されていることが読み取れる。これらのベンチに座ることで、天王洲を訪れる人はそれぞれの時間を水辺あるいはアートと共に過ごすことが可能になり、高

層マンションが立ち並ぶ天王洲でも、低層部の歩行空間で心地よい時間を過ごすことが出来るだろう。天王洲は企業や行政などの街の作り手が水辺やアートを魅力として訪れたくなる街を作り、そこにベンチが置かれることで、訪問者はベンチに座ると街に溶け込んだ水辺やアートが見え、憩いとなる。水辺やアートを引力とした設計の相互関係と滞在が可能なベンチによって魅力的な街となったと言える。

最後に、今後の展望として、天王洲の特徴である水辺とアートの両方を楽しむ事が出来る範囲を広げるとより良いのかもしれない。「PETALS TOKYO」の様な水上アートホテルは存在するものの、今回作成した地図から水辺とパブリックアートの両方を楽しめる範囲は意外にも限定的であることが分かった。現実的な実現は困難だろうが、建物をガラス張りにして内側の土地からでも水辺が見える設計にすることや、水上インスタレーションの設置などによって、水辺とアートの両方を体感できるより、より天王洲らしい体験が可能になるのではないだろうか。

【注】

- (注 1) 一般社団法人 エリアマネジメント TENNOZ
- (注 2) ARYS, 2019, "The Shamisen" Shinagawa 2019",
- (注 3) KINJO, 2022, "River eyes"
- (注 4) 山田美優, 2022, "wrapping"
- (注 5) 三島喜美代, 2012, "Work 2012"

【参考文献】

- (文献 1) 一般社団法人 エリアマネジメント TENNOZ, "ART WALK", アートになる島、ハートおある街 @TENNOZ, <https://www.e-tennoz.com/enjoytennoz/artwork.html>
- (文献 2) TENNOZ ART MAP 2023, 一般社団法人天王洲キャナルサイド活性化協会 <https://canalside.or.jp/wp/wp-content/uploads/2023/03/TENNOZARTMAP2023.pdf>

【図表の出典】

- (1) (2) 執筆者（佐藤奈々恵）撮影
- (3) 執筆者（濱崎愛梨）撮影
- (4) (5) 執筆者（岡部光越）撮影
- (6) (7) 執筆者（大鹿新之助）
- (8) (9) 執筆者（野見山祐作）作成
- (10) (11) (12) (13) 執筆者（佐藤奈々恵）作成

【執筆者】

1. 濱崎愛梨 Hamasaki Airi (文化構想 4 年)
2. 八木沢里紗 Yagisawa Risa (文化構想 3 年)
3. 大鹿新之助 Oshika Shinnosuke (文化構想 3 年)
4. 岡部光越 Okabe kouetsu (文化構想 3 年)
5. 佐藤奈々恵 Satou Nanae (創造理工修士 1 年)
6. 野見山祐作 Nomiyama Yusaku (創造理工修士 1 年)

記憶の痕跡

Traces of Memory

プロジェクト概要

本プロジェクトは、天王洲及び品川エリアの街並みに「記憶の痕跡」を探す事で、同エリアの特色を明らかにし、未来の街作りの展望を見出す事を目的としている。研究プロセスとして、文献調査・現地調査を通して「記憶の痕跡」を集め、「記憶の痕跡マップ」を作成する事で、分析・考察を行った。調査の結果、同エリアの「記憶の痕跡」は、「1. ヒトとモノの軌跡」「2. 水の記憶」「3. 産業の記憶」の3つのカテゴリーに分類出来る事が分かった。カテゴリー毎にマップを作成し分析・考察を行った結果、「1. ヒトとモノの軌跡」では、ヒトやモノが集まり大きく動く、流通の拠点としての街の姿を読み取る事が出来た。「2. 水の記憶」では、古くから川や運河、海に囲まれ、埋め立てが行われてきた「水の都」としての街の歴史を読み取る事が出来た。「3. 産業の記憶」では、産業・街の発展の歴史を読み取る事が出来た。さらに3つの「記憶の痕跡マップ」を重ね合わせた分析では、水の都としての記憶や地域発展の歴史を共通して持つ、連続した1つの街と捉えられる事を明らかにした。今後の展望として、共通の記憶・歴史を持つにも関わらず街の雰囲気が異なっている現状を、文化的に分断されている状態であると考え、2つのエリアの分断を解消する為、アートというメディアを用いた街作りを提案する。

1. ヒトとモノの軌跡

旧東海道と七福神

江戸時代、北品川駅から青物横丁駅は東海道一の宿場だった。元来品川宿は北品川宿と南品川宿の二宿で構成されていたが歩行新宿が加わり三宿となる。品川橋がその南北を分ける境界の役割を果たしていた。聖蹟公園は東海道品川宿の本陣跡である。また、北品川から大森までの4.5キロは恵比須・大黒天・毘沙門天・弁財天・福禄寿・寿老人・布袋尊の東海道七福神を祀る寺社があり、品川が大東京市に編入された記念に東海七福神初詣として定められた。

釜屋跡

南品川にあった釜屋は宿場間に設けられた旅人の休息場である建場茶屋の一つであり、のちに高価な宿泊施設である旅籠に発達した。幕末には幕府御用宿となり多くの幕臣たちが東海道を通る際に利用したとされている。かつて品川宿は江戸に近い立地であったため、江戸を発つ人々のための宴会を開く場や参勤交代の際の支度場としてよく利用された。その中でも品川寺前の釜屋は海を望める宿場として栄えたようである。1867年に新撰組副長の土方歳三等が訪れ、1868年には新選組隊士がしばらく滞在した。現在この釜屋跡にはマンションが建設されている。

運輸拠点

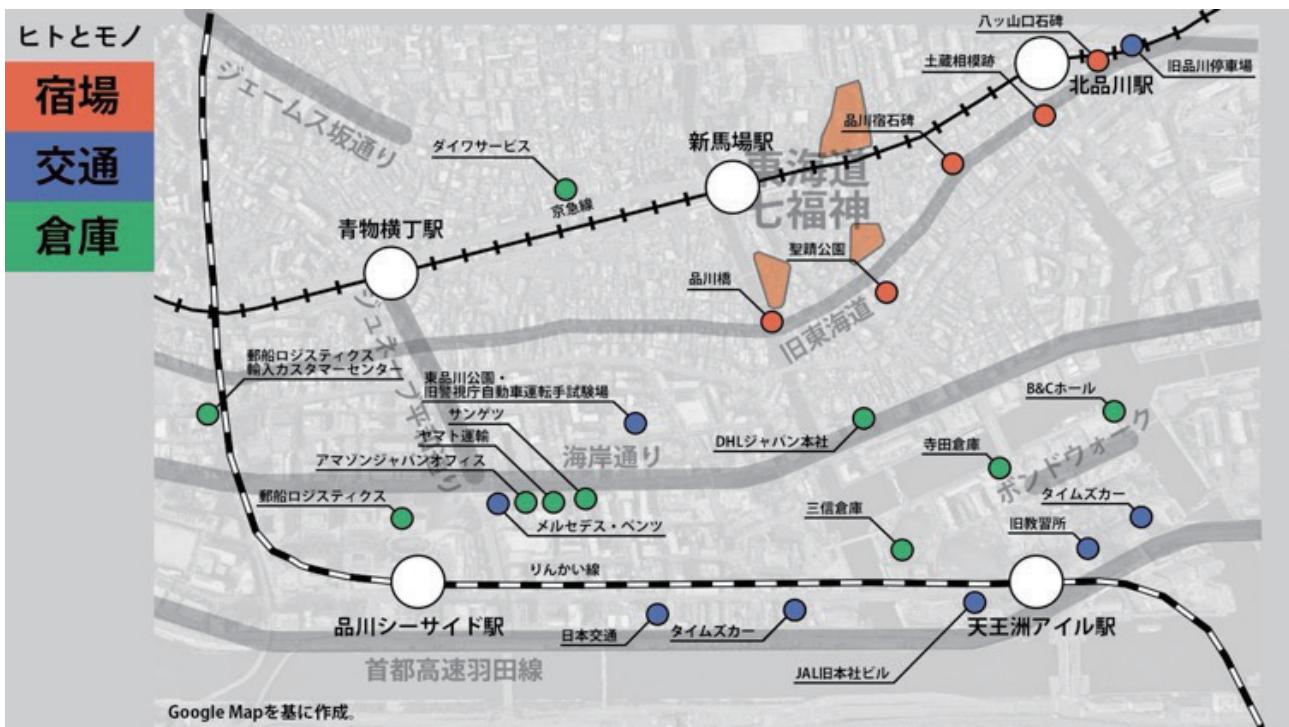
埋立地完成により、品川エリアは警視庁自動車運転手試験場、現在の東京都立八潮高等学校や東京都立産業技術高等専門学校の新設・移転先となった。東品川の試験場の跡地の一画には東品川公園が開設された。現在は子どもたちが自転車を練習できる自転車コースが設けられ自転車専用信号機まで設置されている。公的交通機関においては、1872年ごろに日本で最初の鉄道が品川～横浜間で開業した。品川停車場が現在の「品川駅」より300mほど南にあり、その歴史を伝えている。新橋へ向かう汽車の窓からはアメリカ人動物学者のモースが貝塚を発見したという出来事が所以となり大森貝塚遺跡庭園が設置される。この庭園は、モース生誕の地であるアメリカ合衆国メイン州ポートランド市との姉妹都市提携締結を記念して昭和60年に開園した。



1 | 品川寺の大黒天 (2023.11.19 川嶋撮影)



2 | 東品川公園の自転車コース (2023.11.19 川嶋撮影)



3 | 地図①「ヒトとモノの軌跡」 (2024.3.3 丸山作成)

地図からの考察

街歩きを実施した品川エリア周辺の交通網としては京急線とりんかい線、首都高速道路、羽田空港という巨大な物流ハブや、東京湾岸の貿易港も近い。特に京急線とりんかい線の二つに着目すると前者に比べて後者のりんかい線の方が駅間が広く、京急線沿いには宿場が、りんかい線沿いには交通・倉庫の拠点が集約している。

また、旧東海道や海岸通りに見られる通り、迂曲した昔の海岸線の名残が見受けられる。これらの通りは道幅が広く運輸拠点も商業施設の集まる道で人通りも多い。この横のラインと同様、縦に走るジュネーブ平和通りや国道357号も直角ではなく横に走る各街道を滑らかに結んでいる。運輸拠点や商業施設は昔から店が並んだ青物横丁の通りに集まっているのはもちろん、海沿いや公園の中にもある。宿場、交通、倉庫は複数の拠点が並んでいる箇所が多く、

それをゆるい曲線で結びつけることができる。反対に、埋立地としての立地特性を持つ海側にはあまり宿場の痕跡が見られない。以上をまとめると宿場や交通拠点、倉庫のある位置に目を向けることでヒトやモノがどのような場所に集まりどのように動くのかを把握することが可能となった。

2. 水の記憶

台場小学校

御殿山下台場(砲台)跡の跡地に建つ小学校。台場の輪郭は道として残り、今でも位置と形を知ることが出来る。また、跡地から見つかった石垣を用いて、現在では記念碑が建てられている。

「どこまでも繋がっていく」

三信倉庫の壁面に描かれた淺井裕介による作品であり、2019年3月に完成した。水色の龍のような生物が大きく描かれており、その中や周囲には、人や植物などのモチーフが描きこまれている。これらのモチーフはいくつもの物語となっており、とぐろを巻くような龍の構図と共に、循環する水というテーマを表現している。

東品川ポンプ所

東品川海上公園の敷地内にあるポンプ所であり、目黒川流域の浸水被害軽減のために建設された。屋上は、庭園として整備されており、一般開放されている。

寄木神社

慶長年間(1598～1614)に創建され、漁師町の鎮守として、江戸名所図会にも描かれている。頭に皿がある珍しい狛犬は「かっぱ狛犬」と呼ばれ、かつては「皿の上に蠟燭を立て灯台の代わりとして沖にいる船の目印とした」と伝わっている。

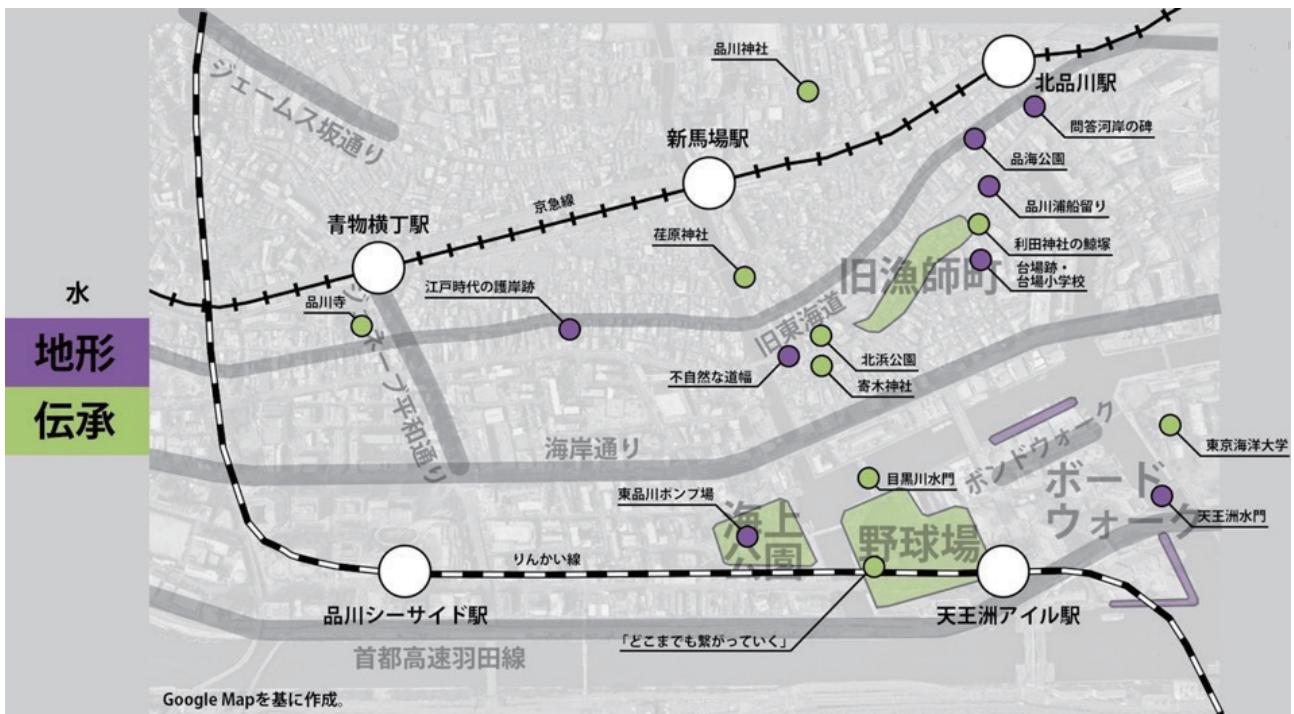


4 | 台場小学校 (2023.11.19 西山撮影)

5 | 「どこまでも繋がっていく」 (2023.11.19 西山撮影)

6 | 東品川ポンプ場 (2023.11.19 香川撮影)

7 | 寄木神社 (2023.11.19 西山撮影)



8 | 地図②「水の記憶」(2024.3.3 丸山作成)

地図からの考察

水の記憶を集めた地図からは、元なぎさ通りを境に記憶の性質が異なっているということを読み取ることができる。内陸側は神社や寺などの歴史の痕跡そのものが多く、海側は公園などの歴史を踏まえ再構築しているものや記憶を活用しているものが多くある。また、天王洲エリアと海岸通りより内陸側の2つのエリアに記憶が密集していることも読み取れる。

以上を踏まえ、記憶の性質がエリアによって異なるのが水の記憶地図の特徴であり、大きく2つの性質に分けられると考えた。1つ目は、歴史の痕跡を保存・継承しているもので、神社や跡地などが見られる。2つ目は、記憶を活用して再構築したもので、公園などが見られる。さらに、記憶の分布の仕方から、土地の歴史を読み取る事が出来た。記憶の分布の仕方は内陸部、中間部、天王洲エリアで異なっており、内陸部には歴史の痕跡が多く、天王洲エリアには再構築したものが多いが、中間部には記憶があまりないということから、天王洲エリアを先に埋め立てし、その間を埋めていった土地形成の歴史が表れていると考えられる。

また、中間エリアに記憶があまりない事について、歴史を再構築した水の記憶を新たに作るべきかという疑問があがったが、産業の記憶など水以外の記憶は分布しており、「水の記憶があまりない」ということ自体が土地の歴史を反映しているとも捉えられるため、むやみに新しく作りあげるよりもそのままの状態の方が良いのではないかと考えた。

3. 産業の記憶

倉庫街として

現在の天王洲がある地域は、江戸時代後期から海運の拠点であり、物流倉庫の中心地であった。1951年に寺田倉庫の創業者である寺田保之助が空襲で焼けた工場の鉄骨で倉庫を建て、倉庫業が拡大した。しかし、1985年、倉庫街としての役割が低迷したことによって、天王洲を含める東京湾一帯の港湾機能の見直しが始まり、オフィス街の開発が考案された。

工業地帯として

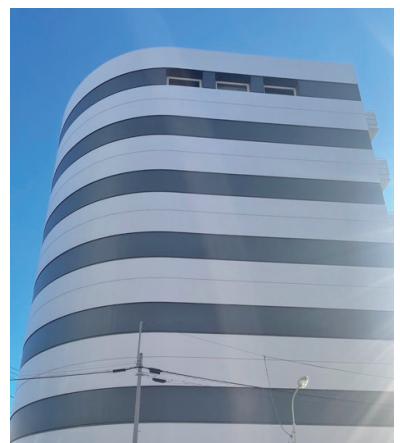
昭和ネオンは1922年に高村看板屋として創業した。昭和に入ってから当時最新であったネオンを取り扱うようになったため、この社名になった。創業以来、屋外広告を中心とした広告業を営んでおり、数多くのネオンサインや企業広告を手掛けてきた。現本社は新馬場駅付近に移転している。

建具屋の集積

畠松岡は安政8年(1779年)に、仙台藩下屋敷のお抱え職人として創業した。仙台藩の下屋敷であった痕跡として、旧東海道近くには「仙台坂」という名の通りが残っている。建設当時は海が近かったため、浜風を防ぐために低い二階建てとなっている。

映像関連事業所の集積

品川や天王洲周辺はテレビ番組の制作会社などが多く集まっている。株式会社イマジカはテレビ番組やテレビコマーシャルなどの制作における映像技術サービスを主な事業としている。元々は写真の現像などを本格的に行なっていたため。遮光性の観点から建物に窓がない。株式会社イマジカ以外にも、テレビ東京本社やパナソニック映像オフィスなど、映像関連の会社が集積しており、この辺り一帯が連携して番組制作から放送までを担えるようになっている。



9 | 畠松岡 (2023.11.19 西山撮影)

10 | 寺田倉庫 E HALL (2023.10.14 香川撮影)

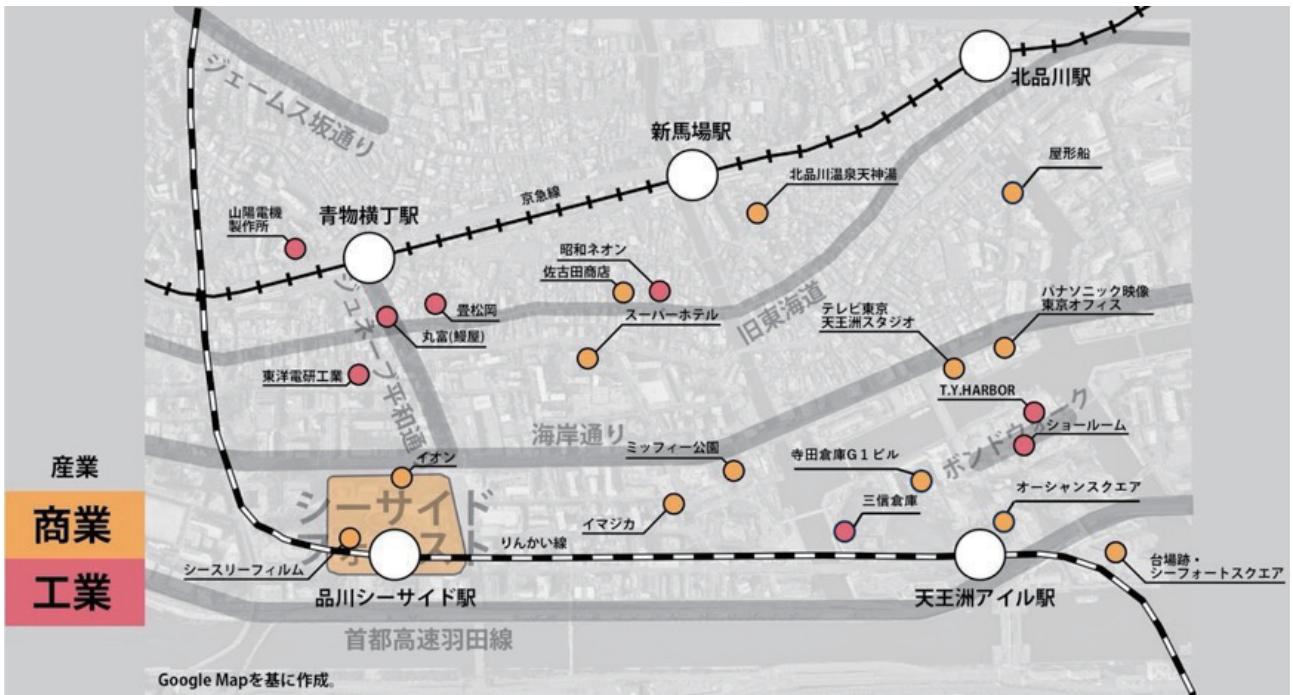
11 | 株式会社イマジカ (2023.11.19 西山撮影)

地図からの分析

地図③からは、産業の発展と街の変遷の関連性を読み取ることができる。現在商店街となっている旧東海道の通りには、歴史のある小規模商店が集中している一方、品川シーサイド駅や天王洲アイル駅周辺には比較的新しい商業施設が集まっていた。また、このような海が近いエリアでは、自動車のショールームや倉庫など広い土地を利用する施設も多く存在した。海岸通り以南に情報関連の会社やアート関連の文化的施設が集積していた。海岸線が内陸から前進するにつれ、産業も新しい分野へと移り変わり、高度化していることが分かる。

以上のことから、内陸部から海側に向かって歴史の積み重ねが層として表れるような形で、産業の発展と街の変遷が今なお形として残っている点に着目した。

産業の記憶の内訳から、湾岸通りを境に、大きく二つのエリアに分けられると考えた。1つは、歴史が長い中小規模の商店や工場がある内陸部のエリア、もう一つは、歴史が浅く、大規模な商業施設やオフィスがある湾岸通り以南の天王洲エリアである。内陸部のエリアには、旧東海道の名残がある商店や京浜工業地帯の機能を受け継ぐものづくり関連の企業が残されており、過去の記憶の保存、維持が主である。一方、海岸通り以南の天王洲エリアでは、工場跡地や倉庫の再利用によってつくられた商業施設等、過去の記憶を再利用新たに作り変えたものが多い。



12 | 地図③「産業の記憶」(2024.3.3 丸山作成)

同地域は、江戸時代にはの宿場町としての機能を担い、昭和初期には埋め立てが行われて工業地帯となった。昭和50年代以降は、工場が共同住宅や倉庫にも活用され、その後オフィス街へと開発が進められていった。こうした各時代の変遷が現在にも残されており、内陸から運河へと変化する層となっていると考えた。

4. 3つの地図

今回調査の対象とした天王洲は、それ自体無色で文脈のない埋立地のように見えるが、しかし右に述べた三つの異なる観点からの「記憶」を統合分析することで、隣接する品川エリアと、水の都としての記憶や地域発展の歴史を共通して持つことがわかる。両者は文脈を共有し、同一線上にある連続した一市街として捉えることができる。

しかしながら、天王洲の都市景観は、品川エリアと比較してその色彩が大きく異なり、通常の都市景観とは異なった様相も呈している。以下にいくらか詳細な考察を続ける。

品川 / 天王洲エリアにおいては、本来的に騒音や公害という問題をもつ倉庫・工業地帯が、商業施設や住宅地（特に高層マンション）と立地を同じくしているという特徴がある。この要因として、(i) 昭和以降の埋立地という特徴、(ii) 各種交通網の存在、(iii) 都心部における立地の特殊性の三つがある。この異質な二者を共存させる緩衝地として、水路や公園がその役割を果たしていると考えられる。

通常、物流倉庫や工業地帯は住宅地から離れた郊外にあり、そこから軽トラックで都会部の各小売店や住宅、取引先へ配送する形態が主である。なぜなら、倉庫や工業地は広い土地を必要とし、騒音や排出物が発生するため、人口密集地から離れ、かつ地価の安い郊外へ立地することへの社会性、経済性要請があるからである。しかし、天王洲 / 品川エリアにおいては、倉庫・工業地帯と商業・住宅地帯が近接ないし同一の位置にある。これは例外的な状態であるといえる。

要因の一は、昭和期以降の埋立造成地であるという特徴にある。地価が安く、広大な土地があり、権利関係も煩雑でないというのは、大規模な施設を必要とする倉庫・工業地帯にとって魅力的だろうし、区割も街路も予め広く直線的にとられており（旧東海道周辺ないし以北と比較しても明らかである）、理想的立地といえる。

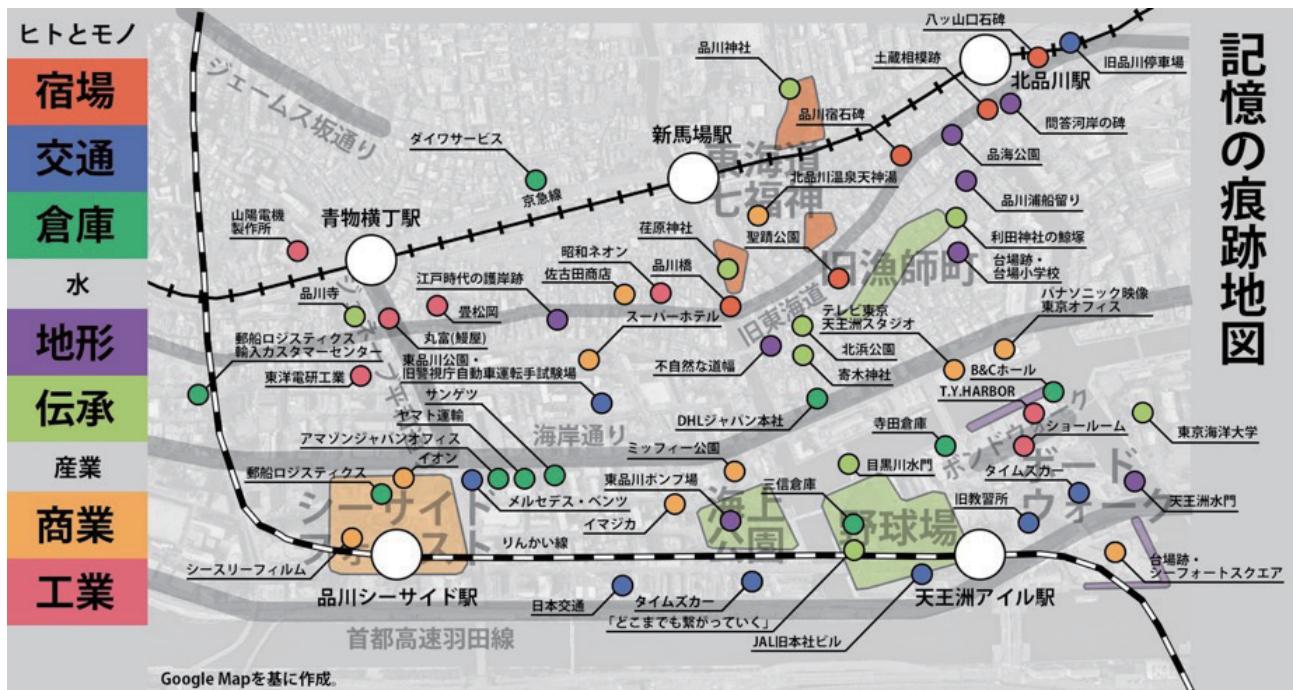
しかしこれだけでは、商業施設や住宅地の立地には不十分である。これらの立地誘因となっているのは、りんかい線と首都高速道路の存在であろう。りんかい線は都心部と台場という主要な勤務 / 娯楽地を結んでおり、この両者の

中間に位置する品川シーサイド、天王洲アイルの両駅は、(i) で述べたように比較的地価が安価であり、かつ交通の便が良い。また首都高速道路によって、羽田空港へ容易にアクセスできるし、都内各所への移動も簡便である。勿論こうした交通の便は、物流倉庫や工業地帯にとっても有為に働くのであり、羽田空港という巨大な物流ハブや、東京湾岸の大規模船舶の寄港できる各種貿易港へのアクセスの容易さは、運送コスト削減と合理化に資する。人が働き住めばまた商業施設も求められ、また土地が広く確保できることから、イオン品川シーサイド店といった郊外型の、駐車場を多数設けることのできる、都心では不可能な大規模店舗もまた立地するし、商業施設にとっても物流上の利点は当然享受するに足る利益である。

かくしてこの地域では、倉庫・工業地帯と商業・住宅地が例外的に近接している。しかし、前者の本質的に持つ騒音公害という問題について、後者はどう折り合いをつけているのだろうか。ここで注目されるのが、水路と公園の多さである。具体的には天王洲の四方をはじめ、目黒川、その他多数の入江と運河にくわえ、東品川海上公園、天王洲野球場、ならびに各建物における緑地帯の多さがこれに相当する。こうした余白は、工業地帯との緩衝としての役割を果たし、住環境との両立に資している。このような、新たな埋立地としての、並びに臨海部、水場としての空間的広さと余裕が、この異質な両者を同居させる媒介となっていると考えられる。

このように、天王洲において、その都市景観や建物立地は、品川のそれと大きく異なる。しかしながら、交通網や経済圏として、両者は一体としてみることができ、また天王洲がかくあるについて、その成り立ちにおいても、現在の都市の様相においても、隣接する既存の品川エリアが天王洲に与えた影響は極めて大きい。

にもかかわらず、文化的な観点からすると、上の「記憶の痕跡」でみたように、両者は分かたれており、非連続であるかのように取り扱われている。天王洲という都市の生い立ちとその実際の生活の持つ、品川との深い関係性のわりに、そこに住む人々からは両者の一体性があり意識されておらず、それは上に挙げたような特殊な都市景観や、水路に隔てられた昭和期以降の埋め立て地であるという現実の様相の所為であろうと思われる。



13 | 「記憶の痕跡地図」(2024.3 丸山作成)

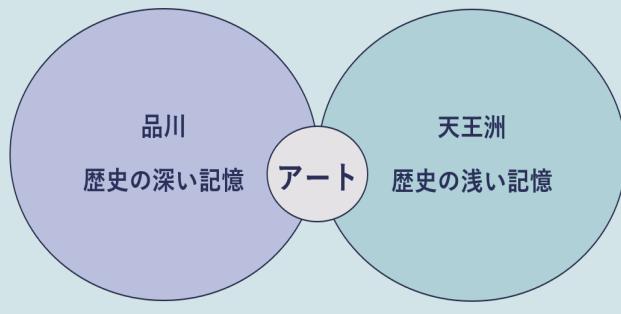
5. まとめ

本プロジェクトでは、天王洲アイル、及び品川の記憶の痕跡に焦点を当て、記憶の痕跡が同地域の街並みにどのような影響を与えていたか調査した。

天王洲・品川は、土地変遷の歴史と水辺の街という記憶を共にしている連続した1つの街であり、倉庫・工業地帯と住環境という異質な2者が共存するという特徴を持ったエリアと捉える事が出来ると考えた。しかし、記憶の痕跡を3つに分類し、それぞれ分析すると、内陸部から天王洲エリアに向かって記憶の痕跡が変化しており、天王洲と品川は、文化的な観点において分断されているように見えた。実際に街を歩いた際も、天王洲と品川を繋ぐ橋を境に大きく街の雰囲気が異なることを実感し、天王洲エリアと品川の非連続性を課題として指摘していた。品川エリアでは、旧東海道の名残のある商店街や工業地帯の名残のある企業など、様々な年代・歴史の深さがある痕跡が見つかった。それに対し、天王洲エリアでは、倉庫業やオフィス街から現在のアートの街としての天王洲への変化など、比較的歴史が浅いものが多く存在した。これらの記憶の痕跡の違いが、品川と天王洲の分断に影響していると考えられた。

以上を踏まえ、これから天王洲の街づくりでは、天王洲固有の魅力や文化の発信に加え、品川との非連続性・分断性を緩和し、品川との融合性の高い街づくりの推進も必要であると考えた。これにも、現在天王洲アイルの街づくりの主軸となっているアートが活用できるのではないかだろうか。記憶の痕跡を表象する手段としてアートを活用することにより、天王洲と品川に連続性を持たせた街づくりが可能になるのではないかだろうか。天王洲と品川、それぞれのエリアの記憶の痕跡を形にする際、アートという同じメディアを使用することにより、街の景観に共通性をもたらせ、分断を緩和できると考える。しかし、記憶の痕跡自体はそれぞれの場所に根差したものを残し、継承していくべきだと考える。品川にあったものを天王洲に、天王洲のものを品川にもっていくのではなく、それらは、記憶の再現となり、偽物に過ぎない。あくまで、その地の記憶の痕跡を活用し、またこれから作られる天王洲の記憶を街の開発に残していくことが、現在ある歴史の層を作っていく要素となり、これから天王洲の発展に生きると考えた。

提案：アートをメディアとした記憶の痕跡活用により、 天王洲と品川に連続性を持たせた街づくり



14 | 「街づくりの展望」(2024.3 中村作成)

【参考文献】

(文献1) しながわ観光協会、東京品川の観光・まちづくり情報サイト、https://shinagawa-kanko.or.jp/recommended_route/toukaishichifukujin/
(最終閲覧日：2024.3.15)

(文献2) 天王洲アイル地域情報サイト、<https://www.e-tennoz.com/whatstennoz/history.html> (最終閲覧日：2024.3.19)

(文献3) 天王洲街づくり協会、天王洲街づくりNEWS、2018、https://www.city.shinagawa.tokyo.jp/PC/kankyo/kankyo-toshiseibi/kankyo-toshiseibi-keikankeikaku/tenno-zu_news.pdf (最終閲覧日：2024.3.20)

(文献4) 画家 浅井裕介、<https://sotokoto-online.jp/people> (最終閲覧日：2024.3.20)

【図表の出典】

- (1)(2) 執筆者（川嶋友菜）撮影
- (3) 執筆者（丸山雅之）作成
- (4) 執筆者（西山夏美）撮影

- (5) 執筆者（香川瑞樹）撮影
- (6) 執筆者（西山夏美）撮影
- (7) 執筆者（西山夏美）撮影
- (8) 執筆者（丸山雅之）作成
- (9) 執筆者（西山夏美）撮影
- (10) 執筆者（香川瑞樹）撮影
- (11) 執筆者（西山夏美）撮影
- (12) 執筆者（丸山雅之）作成
- (13) 執筆者（丸山雅之）作成
- (14) 執筆者（中村明日香）作成

【執筆者】

- 1. 川嶋友菜 Yuna Kawashima (文化構想 4 年)
- 2. 中村明日香 Asuka Nakamura (文化構想 4 年)
- 3. 奥遥奈 Haruna Oku (文化構想 4 年)
- 4. 本多沙綾 Saya Honda (文化構想 3 年)
- 5. 丸山雅之 Masayuki Maruyama (法 4 年)
- 6. 西山夏海 Natsumi Nishiyama (文化構想 3 年)
- 7. 香川瑞樹 Mizuki Kagawa (文化構想 3 年)

天王洲アイルの美術館・ギャラリー

Analysis of Art Museums and Galleries on Tennozu Isle

プロジェクト概要

本プロジェクトは、天王洲アイルにある美術館やギャラリー等のアートを扱う施設を対象に調査したものである。ここでは、これら施設の特徴について把握するため、展示内容やアーティストについて調べ、地区全体のアートにかかる傾向を考察しようとした。具体的には、まず本地区にある美術館および各ギャラリーにおける展示作品の内容に関し、作品の特徴をつかむべく、具象／抽象、平面／立体、日本人アーティスト／海外アーティスト、アーティストの年齢等、項目を出して調べた。次にそれらをグラフ化するなどして整理し、各ギャラリーの特徴や傾向を可視化することで分析を試みた。はじめに寺田倉庫がてがける2施設、WHAT MUSEUM および WHAT CAFÉについて調査し、展示内容やコレクションの特徴、客層の傾向などを分析した。また寺田アートコンプレックスについては、全体像を概観したのに加え、とくに3つのギャラリー (Tomio Koyama Gallery, Takuro Someya Contemporary Art, Anomaly) については、ギャラリーの協力を得てインタビューを行い、統計的な調査からはわからない各ギャラリーの特徴やねらいを考察した（なお本インタビュー詳細については別途記載・公開予定）。さらに、天王洲地区におけるアートを用いた街づくりの取り組みや展覧会の開催についても調べ、天王洲のアートシーンの特色を明らかにした。

1. 目的と調査の方法

本調査では、天王洲アイルにおけるアートの全貌を明らかにするため、美術館とギャラリーの両方について調査、考察した。各施設はそれぞれ異なるコンセプトを持っているため、内容の詳細やその傾向に関する基本的情報を集め、①カード化することによって整理した。②また項目ごとに、内容を統計的な分析によりグラフ化することで可視化して示した。

2. WHAT MUSEUM および WHAT CAFÉ

天王洲のアートの中心となる施設は寺田倉庫が運営する WHAT MUSEUM および WHAT CAFÉ である。

WHAT MUSEUM はその名のとおり美術館だが、通常の美術館とは運営が大きく異なる特別な美術館といえる。ここでは最近行われた展覧会から、その傾向について調査した。

大きな特徴は①建築に関連する展覧会の開催、②コレクターによるコレクション展の企画展示の2つにある。「建築倉庫」として建築に関わる展覧は、本美術館が当初から中心に行ってきた展示で、建築を専門にする美術館が他にあまり存在しないため、高い優位性をもっている。企画展示のほか、最近では寺田倉庫が預かり保管している建築模型の一部を公開してもおり、保管の現場も見られる特異な展示手法といえる。一方、コレクターのコレクションによる美術展は、寺田倉庫に美術品を預けているコレクターをベースにした展覧会として近年企画されてきたものであるが、これもまた、倉庫に本来眠っている作品を活用したもので、特異な企画展といえる。TAKEUCHI COLLECTION「心のレンズ」展（2023年9月30日—2024年2月25日）を例にみると、ここではコレクターの竹内真氏が収集した現代アートのうち、総勢35人のアーティストの作品が展示されている。400点ほどのコレクションのなかから、竹内氏が近年興味を持つ抽象画を中心に、ピカソやイヴ・クライン、リヒター、さらにはコルビュジエの家具などが出品されており、コレクター自身のコレクションの意向がわかる展覧となっているのが特徴といえよう。

WHAT CAFÉは、寺田倉庫によるもう一つのアート関連施設であるが、WHAT MUSEUMとはまったく異なる意図をもったアート施設となっている。ここでは、毎回多様なアーティストの作品を展示・販売している。

各企画展について調査・分析してみると、こちらは若いアーティストの作品が多く展示されていることがわかり、若手アーティストの育成や活躍の場を提供する意味が大きい場所と考えられる。調査をした2023年度を例にとってみても、9つの企画展が開催されており、比較的短い期間で、多くの作家たちの作品が入れ替わり展示されている。ここではカフェが併設されており、運河も臨める施設となっていることから、必ずしも美術鑑賞を目的とした人でなくとも、アートを偶然、楽しむことが出来、自然とアートと触れる空間が創出されているのが興味深い。年代を問わず幅広い層の人々をアートへと誘い、作品鑑賞を身近なものとし、購入につなげる場となっている。

寺田倉庫が運営する以上2施設は、異なったコンセプトにより、倉庫会社ならではの施設や利点を活かしたきわめて独特的なアート関連施設となっているといえよう。これらは天王洲アイルの中核となる地点、すなわち、ボンドストリートの入り口となる位置にWHAT MUSEUMが、また道の中ほどにWHAT CAFÉが設けられており、その中間をパブリックアートが繋ぐ形で連結しており、天王洲アイルにおける「アート」の存在を印象付ける中核的存在となっている。

3. TERRADA ART COMPLEX

本施設は、2016年にTERRADA ART COMPLEX I、2020年にはTERRADA ART COMPLEX IIと、2棟の建物が開業し、天王洲のアート発信を担うギャラリーの複合施設となっている。ギャラリー・コンプレックスとして日本最大級のギャラリー数を誇るとともに、日本を代表するギャラリーで構成されている。またアーティストのための制作スタジオ、保税倉庫、さらにはカフェの施設もある。

現在ここに入るのは、以下のギャラリーである。

TERRADA ART COMPLEX I：8 ギャラリー

Maki Gallery、Kotaro Nukaga、Takuro Someya Contemporary Art、Standing Pine、Anomaly、Tomio Koyama Gallary、Scai Park (Scai the Bathhouse)、Kosaku Kanechika。

TERRADA ART COMPLEX II：11 ギャラリー

Maki Gallery、Yukio Muzutani、Gallery UG、Mu Gallery、Tokyo International Gallery、Contemporary Tokyo、The Anzai Gallery、Sokyo Gallery、Taka Ishii Gallery、T & Y Projects、Shugo Arts

本調査では、まずギャラリーごとの特徴をカード化してまとめた。以下がその例である。

ギャラリーナ	ANOMALY
設立年	2018
代表者	共同代表:山本裕子、浦野むつみ、橋本かづみ
ギャラリーの歴史	「山本現代」「URANO」「ハシモトアートオフィス」が合併し、2018年に天王洲においてオープンした。
取り扱いアーティスト	青木野枝、淺井裕介、岩崎貴宏など
特色、理念	「ANOMALY」とは正論や常識では説明不可能な事象や個体、変則や逸脱を表す言葉から取られている。現在行われている個展においても私たちの認識とは少し異なる現実の姿を表現し、変則が表されていると考えられる。
調査結果	具象3%抽象97%海外21%日本79%平面41%立体26%平均年齢52歳
場所	天王洲



撮影:谷原義基

そのうえで、各ギャラリーで扱われている作品の傾向を把握するため、ギャラリーのホームページ等から情報を得て、全体像を分析した。それらを整理・分析し、グラフにまとめたのが以下である。

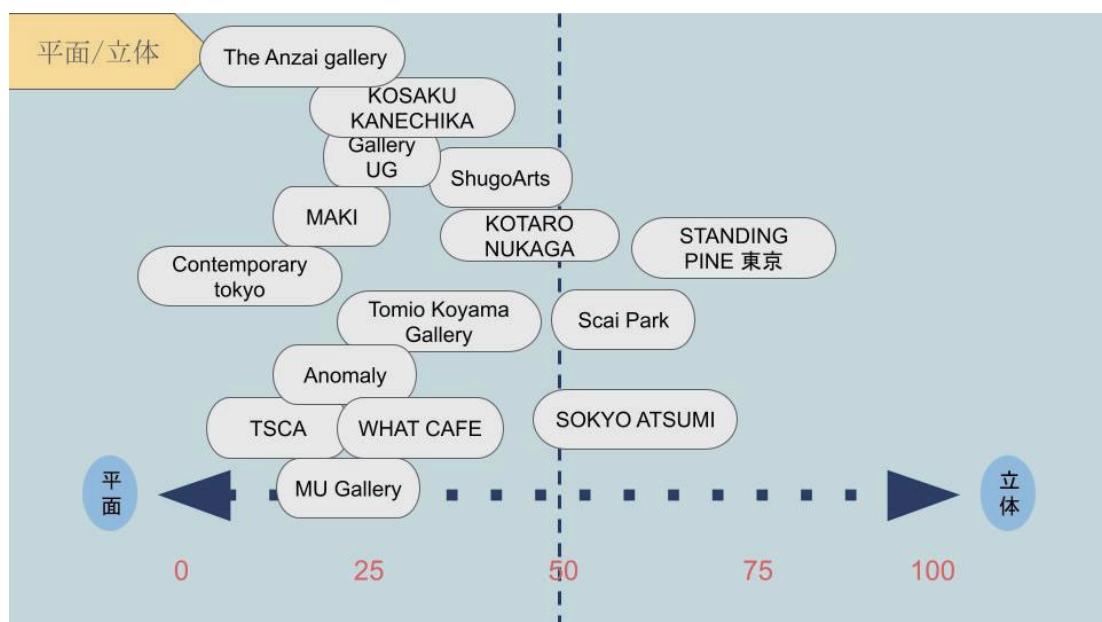
【具象、抽象】



グラフ 1

グラフ 1 は、各ギャラリーの取り扱う作品を具象、抽象の割合を示したものである。ただし、抽象、具象の判断についてはメンバーの判断に従っている。ギャラリーごとに偏りがあるものの、全体として見ると、抽象、具象の割合にそれほど大きな差はないことがわかった。

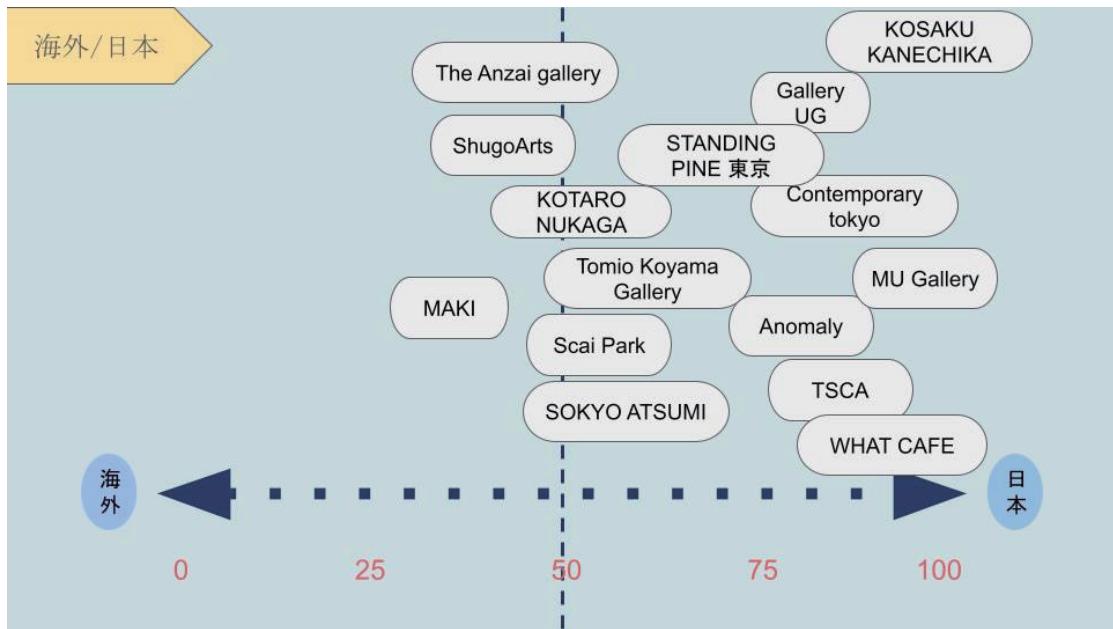
【平面、立体】



グラフ 2

グラフ 2 は各ギャラリーの作品を平面と立体でグラフ化したものである。立体作品より平面作品の割合が大きい。

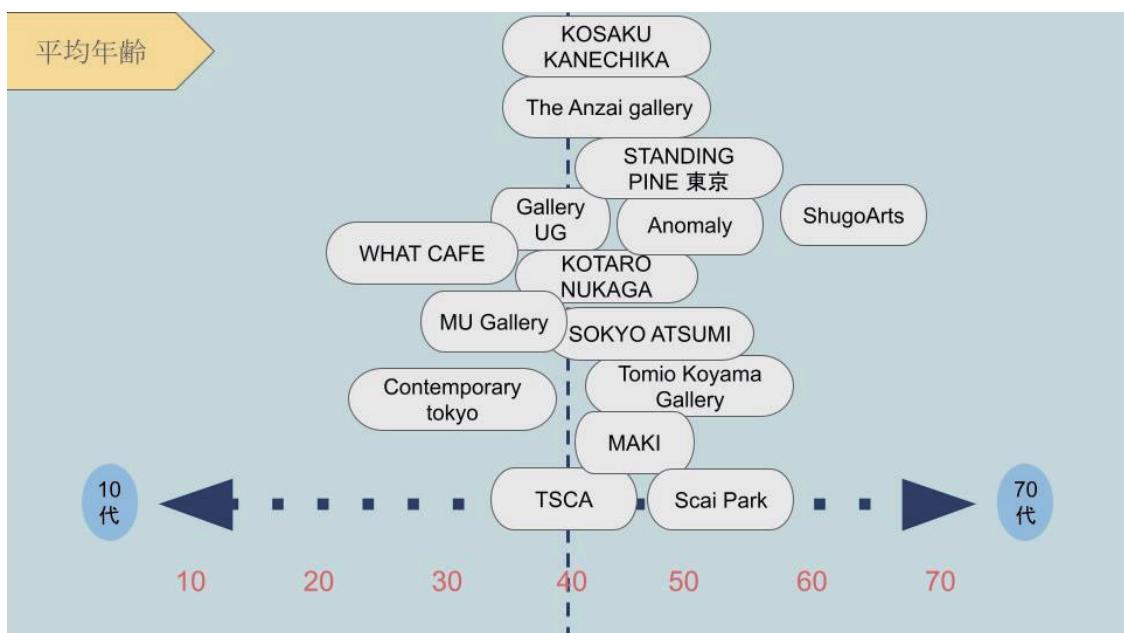
【海外、日本】



グラフ 3

グラフ 3 は各ギャラリーの所属アーティストの活動拠点を日本と海外とで分けて視覚化したものである。保税倉庫の存在や天王洲という立地から、海外アーティストの取扱いが多いのではないかという推測があったが、実際にはそうではなかったことがわかった。

【アーティストの年代】



グラフ 4

グラフ 4 は所属アーティストの平均年齢を示したものである。ギャラリーによっては 60 代以上のアーティストを主に取り扱っているものもあり、比較的年齢層が高く評価の安定したアーティストが多いことがわかった。

以上の調査から得られた結果は以下である。

ギャラリー全体の特徴として、半数以上が抽象的作品を扱うギャラリーであり、具象的作品を扱うギャラリーは 4 割程度であることがわかった。また具象、抽象のどちらかに重きを置いているギャラリーが多く、各ギャラリーによってそれぞれ特徴があることがうかがえる。立体作品、平面作品に関する分析でわかったのは、平面作品が多いのは、ギャラリーによってはスペー

ス自体がさほど大きくなことが、理由の一つであると考える。また2割ほどのギャラリーでは、さまざまな角度から立体作品を楽しむことを意図した空間が提供されていた。

さらに、テラダアートコンプレックスに属しているギャラリー3つ (Tomio Koyama Gallery, Takuro Someya Contemporary Art, Anomaly) を対象に、インタビューを実施した。これについては、別途、報告書にまとめる予定だが、以下これらを含め、天王洲のギャラリーに関する特徴を、まとめた。

1. 有名ギャラリーが数多く集まる日本でも特別な場所

天王洲は有名ギャラリーが多数集まる地となっている。その理由の1つは、天王洲のもつ地理的な利点である。天王洲では各ギャラリーが倉庫を利用出来、この地ならではの要素といえる。またすでに多くのギャラリーが集まっているという意味で、世界的にも知名度の高い場所となっている点も、ギャラリーが出店する決めてとなるっている。さらに交通の便でも利便性の良い立地といえる。

2. 各ギャラリーが独自性をもった展示

天王洲のギャラリーの多くは、所属するアーティストの選定基準において一貫性を持たず、人柄や人間力に重点を置き、ギャラリーとの連携によって相互の価値の向上を目指していると考えられる。また、展覧会を企画するうえでも、コンセプトは個々のアーティスト自身が決定し、作家の方向性や認識のすり合わせを密に行うことによって作家の意志、見せたいものを明確に顧客に伝えることを重要視しているように思われた。さらに、展覧会の頻度が高く、展覧会期間外に作品のビューイングや作品の撮影が可能であることはアートの島である天王洲だから開催できる特性であると考える。

3. 幅広い年代のアーティストの活躍と顧客層の存在

天王洲のギャラリーは、有名ギャラリーが多く、評価の安定した年齢層の高いアーティストを多く扱っている一方で、若手のアーティストが活躍できる場ともなっていると考えられる。ここでは6m×6m程の広すぎない会場もあり、若手アーティストにとっても負担が少なく展示できる空間が提供されている。顧客としては、ギャラリーごとに扱う異なる作家・作品の作風にそれぞれ興味のある人が多くいることがわかった。日本では、ギャラリーというと敷居が高く誰でも気軽に足を運ぶ事が出来ないイメージがあったが、最近では天王洲地区に若い人たちが多く訪れる事から、アートコンプレックスのような施設には、若い世代も美術館のようにアートギャラリーを訪れ、めぐることができるよう思われた。

【参考資料】

- (資料 1) YUKIKO MIZUTANI、<https://yukikomizutani.com/japanese/> (最終閲覧 2024年3月20日)
- (資料 2) TOKYO INTERNATIONAL GALLERY、<https://tokyointernationalgallery.co.jp/ja/> (最終閲覧 2024年3月20日)
- (資料 3) TAKA ISHII GALLERY、<https://www.takaishiigallery.com/jp/> (最終閲覧 2024年3月20日)
- (資料 4) The Anzai gallery、<https://www.theanzaigallery.com> (最終閲覧 2024年3月20日)
- (資料 5) KOSAKU KANECHIKA、<http://kosakukanechika.com> (最終閲覧 2024年3月20日)
- (資料 6) STANDING PINE 東京、<https://standingpine.jp> (最終閲覧 2024年3月20日)
- (資料 7) Takuro Someya Contemporary Art | TSCA、<https://tsca.jp/ja/> (最終閲覧 2024年3月20日)
- (資料 8) Tomio Koyama gallery、<http://tomiokoyamagallery.com> (最終閲覧 2024年3月20日)
- (資料 9) Contemporary tokyo、<https://www.contemporarytokyo.com> (最終閲覧 2024年3月20日)
- (資料 10) Shugoarts、<https://shugoarts.com/about/> (最終閲覧 2024年3月20日)
- (資料 11) SOKYO ATSUMI、<http://gallery-sokyo.jp> (最終閲覧 2024年3月20日)
- (資料 12) KOTARO NUKAGA、<https://kotaronukaga.com> (最終閲覧 2024年3月20日)
- (資料 13) MAKI Gallery、<https://www.makigallery.com/ja/> (最終閲覧 2024年3月20日)
- (資料 14) Scai Park、<https://www.scaithebathhouse.com/ja/gallery/park/> (最終閲覧 2024年3月20日)
- (資料 15) MU gallery、<https://www.mugallery-tokyo.com> (最終閲覧 2024年3月20日)
- (資料 16) Anomaly、<http://anomalytokyo.com> (最終閲覧 2024年3月20日)
- (資料 17) Gallery UG、<https://gallery-ug.com> (最終閲覧 2024年3月20日)
- (資料 18) T & Y Projects、<https://www.ty-projects.com> (最終閲覧 2024年3月20日)

【図表の出典】

グラフ①②③④ 正村瞭子作成

【執筆】

中村由佳（文化構想 4 年）

水谷柚佑佳（文化構想 4 年）

【インタビュー】

正村瞭子（文化構想 4 年）

【調査】

長山楓（文化構想 4 年）

谷原義基（文化構想 4 年）

石澤果林（文化構想 3 年）

富高桜（文化構想 3 年）

謝辞 調査にあたり、以下関連の方々にインタビューをさせていただきました。心より感謝申し上げます。

（なお、インタビューについては別途掲載予定）

寺田倉庫

Tomio Koyama Gallery

Takuro Someya Contemporary Art

Anomaly

天王洲におけるパブリックアート・デザイン・建築

Public art, Design, and Architecture in Tennozu Isle

プロジェクト概要

本プロジェクトでは、「アートのまち」としての施策を進める天王洲アイルに設置されている「パブリックアート」について3つの点に主軸を置き、調査・考察した。1つ目は、現存する30点以上のパブリックアートに関わる調査である。この調査では「TENNOZ ART MAP 2023」に記載されていないパブリックアートも含め、天王洲で発見したすべての作品について、作品の形態、具象／抽象といった作風の特徴を調べた。そのうえで本地区におけるパブリックアートの意味や役割を分析し、「アートのまち」としての現在の課題について考察を行った。2つ目は、天王洲アイルにある建築に関わる調査である。ここでは天王洲アイルに現存する建物すべてにつき、所有者および建築年を調査しました。その結果、パブリックアートが建物のエントランスや建物外壁に設置されている場合が多いことがわかり、これらの作品設置の経緯を調べるとともに、その特徴を考察した。3つ目は、人々が街を散策する際に役立つ「作品鑑賞ルート」の提案である。これは人々の動線を広げ、パブリックアートをさらに多くの人に観覧してもらうための試みだが、ここではまた、現存する作品に加え、新しく作品を設置する場所についての提案も行った。

以上の調査から、天王洲においては、倉庫建築という特性を活かしたパブリックアートである壁画が、上手く利用されていること、また若手作家による親しみやすい作品が多いことがわかった特徴としてあげられる。さらに設置場所、および作品の主題の両方について、水辺と関連性のあるものが多く、天王洲という場所性が作品と大きく関わっていることがわかった。これらアート作品は街に明るさをもたらし、休日に訪れる人々に安らぎを与えるものとして、大きな意味を担っているものと考えられる。

1. 目的・調査方法・手順

目的

「アートの街」を打ち出す天王洲アイルにおけるパブリックアートにはどんな特徴があるのか、また建築とどのような関係性があるのかを明らかにしたうえで、人々がこの街を歩く際の動線を広げるための鑑賞ルートの提案を行う。

調査方法・手順

調査は以下の手順で行う。(1) 現地でフィールドワークを行い、天王洲アイルに設置されているパブリックアートすべてについて写真撮影を行い、作品の設置場所・作品名・作者名・サイズ・特徴などの情報を得て記録する。(2) 以上の結果を元に統計的な分析を行い、天王洲におけるパブリックアートの傾向および特徴を赤らかにする。(3) 現地でのフィールドワークを通して建築の特徴について調査し、アート作品同様に、それらの情報をカードに整理し記録する。(4) すべてのパブリックアートおよび、デザイン性の高いアイテム、特徴的な建築を見出し、作品の設置場所に関する課題について考察したうえで、これらを総合的に判断し、「作品鑑賞ルート」を考案する。これらを示した天王洲の新たなアートマップを作成する。なお現地調査とともに、ここでは天王洲の街づくりを推進する株式会社寺田倉庫への質問票によるインタビューも並行して行う。

2. 天王洲におけるパブリックアートの調査

調査カード

調査を行った作品および街中のデザインの情報は図のような「調査カード」に記入し、整理した(図1)。項目には「調査日時」、「設置場所」、「作品名」、「作者名」、「制作年」、「サイズ」、「素材・技法」、「作品の特徴」、「具象 / 抽象」、「参考文献」を設けた。

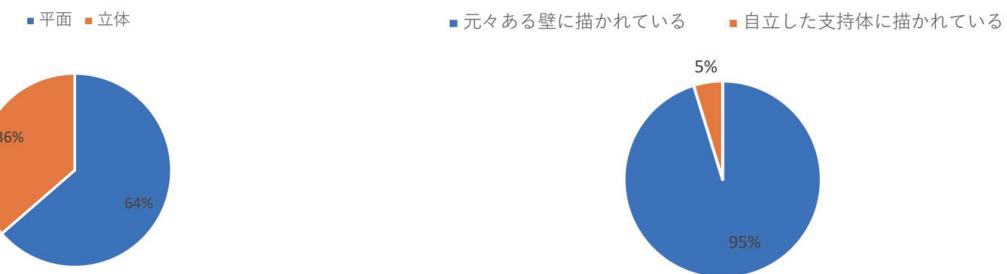
場所	東横イン品川港南口 正面
作品名	Work 2012
作者名	三島喜美代 (1932)
制作年	2012
サイズ	約H200cm×W150cm
素材・技法	印刷したセラミックに手彩色
特徴 (ディスクリプション) ・ その他	見上げるほど巨大なゴミ箱の中に、実際に流通しているものを模した巨大な陶器の段ボールが入っている。ゴミ箱という日常的なものが大きくなることで、非日常的な光景が生まれている。(具象)
参考文献	美術手帖 三島喜美代 (最終閲覧2023年11月28日) https://bijutsutecho.com/artists/823



1 | 調査カード例 : 三島喜美代《work2012》、2012、約 H.200 × W.150cm、印刷したセラミックに手彩

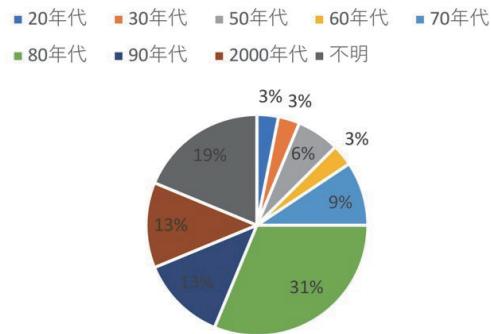
フィールドワークを通して発見したパブリックアートは計34点であり、ここには既存の「天王洲アートマップ2023」に掲載されていない作品も4点含まれる。これらのパブリックアートにはどのような傾向が見出せるか、統計的な分析を行った。そこでは、作品調査カードに基づき、①作品形式(平面 / 立体)、②平面作品における支持体(既存の壁 / 独自の支持体)、③作家の出生年代、④作品の特徴(具象 / 抽象)、⑤水辺から見える作品の割合、⑥サイト・スペシフィック性がある作品の6項目について分析を行った。

まず作品形式について、平面か立体かで分類した。その結果、平面作品が65%、立体作品が35%であり、平面作品が7割近くを占めるということが明らかになった(図2)。さらに平面作品に関し、支持体別に分類したところ、1点を除くすべてが壁を支持体としていることが判明した(図3)。このように壁画が利用されている点に、天王洲におけるアートプロジェクトの特異性が見出せる。インタビューで株式会社寺田倉庫より得られた回答によれば、天王洲は元々物流の拠点であるため倉庫が多く、窓のない巨大な壁面があり、これらを利用した作品の形態としてウォールアートが選ばれやすい傾向にあるという。よって倉庫の壁面を利用した巨大な壁画作品は、土地の特性を利用して天王洲に特有であり、天王洲らしさを反映した作品ということができるだろう。



次に作家の出生年代について分析した結果、80年代以降に出生した作家の数が6割を占め、若手を採用する傾向が強いことがわかった(図4)。中には2000年代生まれの非常に若年の作家も存在し、天王洲アートプロジェクトを若手作家の作品発表の場としているとする意図が読み取れる。また壁画作品の多さを先述したが、壁に直接描く作品形式はストリートアートおよびグラフィティと重なる。このようなジャンルの作品を作成する作家は、比較的年齢

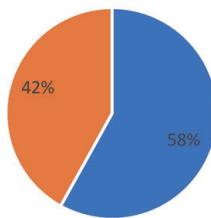
が若いと考えられ、壁画と相性の良い天王洲は、同時にストリートアート等に関わりのある若手作家とも相性が良いと考えられる。



4 | アーティストの出生年代の割合

続いて、作品の具象・抽象の別について考察した。具象芸術と抽象芸術の定義付けはそもそも難しいが、ここでは天王洲のパブリックアートの大きな傾向を見出すべく、具象作品の定義を「一見して何がモチーフとなっているかがわかる」ものとし、それ以外を抽象作品として考えた。その結果、具象作品が 58%、抽象作品が 42% と、具象作品の方が 16% 多いということが明らかになった（図 5）。作品の親しみやすさの度合いはさまざまな要素により左右されるが、作品が具象的であることはその一つとなりうるだろう。一見して何が表現されているか把握できることにより、子どもおよびアートに特別な関心のない人に対しても分かりやすく、親しみやすさを持ってアプローチできる可能性が高いからである。

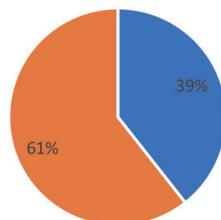
■ 具象 ■ 抽象



5 | 具象作品と抽象作品の割合

次に、天王洲アイル最大の地理的特徴ともいえる運河と作品の関係性に注目し、水辺から鑑賞可能な作品の割合を調査した。その結果、水辺から見える作品が 4 割を占めた（図 6）。約半分の作品が運河の景観と合わせて鑑賞を楽しめるように配慮されたうえで設置されており、ここからは「運河とアートの街」というイメージを後押しする意図が読み取れる。また 5 点存在する大壁画のうち 4 点については、天王洲地区の内外をつなぐ橋からも見えるように設置されていることを発見した。島の外からも視認できる設置場所が選択されていることで、周辺エリアをも巻き込み、人々の生活の中にアートが存在する「アート的景観」の形成が実店していると考えられる。

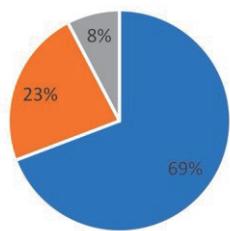
■ 水辺から見える ■ 見えない



6 | 水辺から見える作品の割合

最後に、サイト・スペシフィック性があるとみなされる作品を発見し、それらに見られるテーマについて分析した。まずサイト・スペシフィックの定義についてであるが、ここでは対象とする作品が、環境、歴史、そこに住もう人々といった、天王洲の種々の「場所の特性」に関し、客観的に見て関連度が高いか否かによって、判断することとした。その結果、全体の約3割である12作品がこれに該当するものと思われた。それぞれのテーマの内訳は「水・運河」が約7割、「歴史」が2割、「居住民」が1割となった（図7）。具体的な作品の例としては、まず水門にくじらのモチーフが描かれた《品川くじら》（図8）は、1798年に品川に鯨が出現した事件を踏まえており、土地の歴史を可視化している点で「歴史」のカテゴリーに含まれる作品として数えられる。また、《イル品川》内のシャッターに描かれた《mirukikuhanasu》（図9）は、アーティストと居住民が協働して制作された経緯をもち、天王洲内では唯一の「居住民」カテゴリーに分類される作品である。

■水・運河・海 ■歴史 ■居住民



7| サイト・スペシフィックな作品のテーマの内訳



8| 佐々木恭子《品川くじら》(2008)



9| 門秀彦《mirukikuhanasu》(2022)

デザインの発見

本調査では、「デザイン」を「都市機能を担いつつも視覚的に工夫が施されたもの」としてみなし、調査の対象として考察した。その結果、9種類11点を発見した（図10）。図10の1から順に、案内板、分電盤カバー、電話ボックス、換気塔、立体駐車場の目隠し、通路壁の平面オブジェ、遊具となっており、街に点在している。これらの興味を引くデザインは、街を歩く中で自然に目に入ることで、自ずと「アートの街」としての天王洲を印象付けることに繋がっていると考えられる。



10| 天王洲のデザイン

3. 天王洲アイルにおける建築の調査

ここでは天王洲アイルに存在する建築すべてについて、建物とパブリックアートとの関連性を考察した。現地調査を行い、パブリックアート設置の経緯や、設置場所の傾向について分析した。

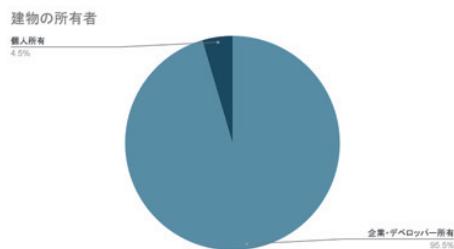
調査カード

「調査カード」の項目としては、「調査日時」、「住所」、「建物名」、「所有者／設計者」、「竣工年」、「建築面積」、「建物の特徴」、「参考文献」を設けた。(文献 1,2,3,4,5,6)

天王洲における建築の特徴

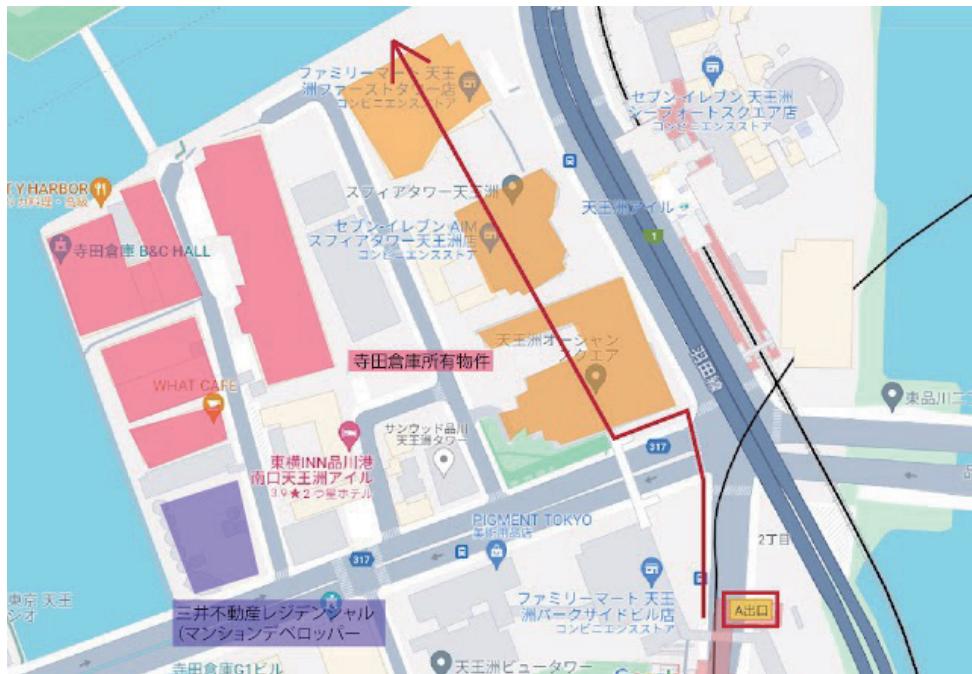
天王洲アイルは 1992 年に東京モノレール羽田空港線の駅が開業し、2001 年に東京臨海高速鉄道の駅が開業しているが、約 30 年の歴史しかないこの埋立地にどのような建物が存在し、アートや景観に影響を与えていたかを考察した。

本調査ではまず、建物の所有者について顕著な特徴が見られた。全体で計 22 棟が確認されたが、そのうち 95.5% にあたる 21 棟が企業や行政、デベロッパーの開発によるものであり、個人所有の土地は 4.5% ときわめて少ないと分かった(図 11)。この調査結果から一般的な住宅地や、歴史的な景観のある街と異なることが分かった。企業やデベロッパーが所有するコンクリート造のビル群は「アートによる街並み形成」や「アートになる島 ハートのある街」というスローガン(注 1)を実現させやすい環境であると考えられる。



12| 天王洲における建物の所有者の割合

歴史的な景観に特に配慮する必要がない事実は、100%の建物が 1990 年代以降に建設されていることから自明である。またアート作品の作家について、1980 年代以降に生まれた若手を中心となっているという調査結果から、天王洲アイルの街の歴史と同年代のアーティストを積極的に起用していることが推測できる。街の歴史と同年齢のアーティストによる作品を採用することで、伝統的な芸術や歴史的な風景ではない、街の歴史に沿った景観の街を形成したいという狙いを感じることが出来た。また、駅の近くにある 3 棟の連続したビル群は、地元の人とオフィスワーカーの利用が特に目立つ建物であることを発見した(図 12)。このビル群は北側から、「天王洲ファーストタワー」「スフィアタワー天王洲」「天王洲オーシャンスクエア」である。3 棟はそれぞれ別の会社が所有しているが、1 階部分が通り抜けられる設計になっている。屋外テラスや屋内ロビーがあり、駅側から一直線に 3 棟の 1 階部分を通過すると運河を望む場所に到り、親水性を軸とした景観を形成する工夫が見られた。



13| 平面作品のうち既存の壁を支持体としているものの割合

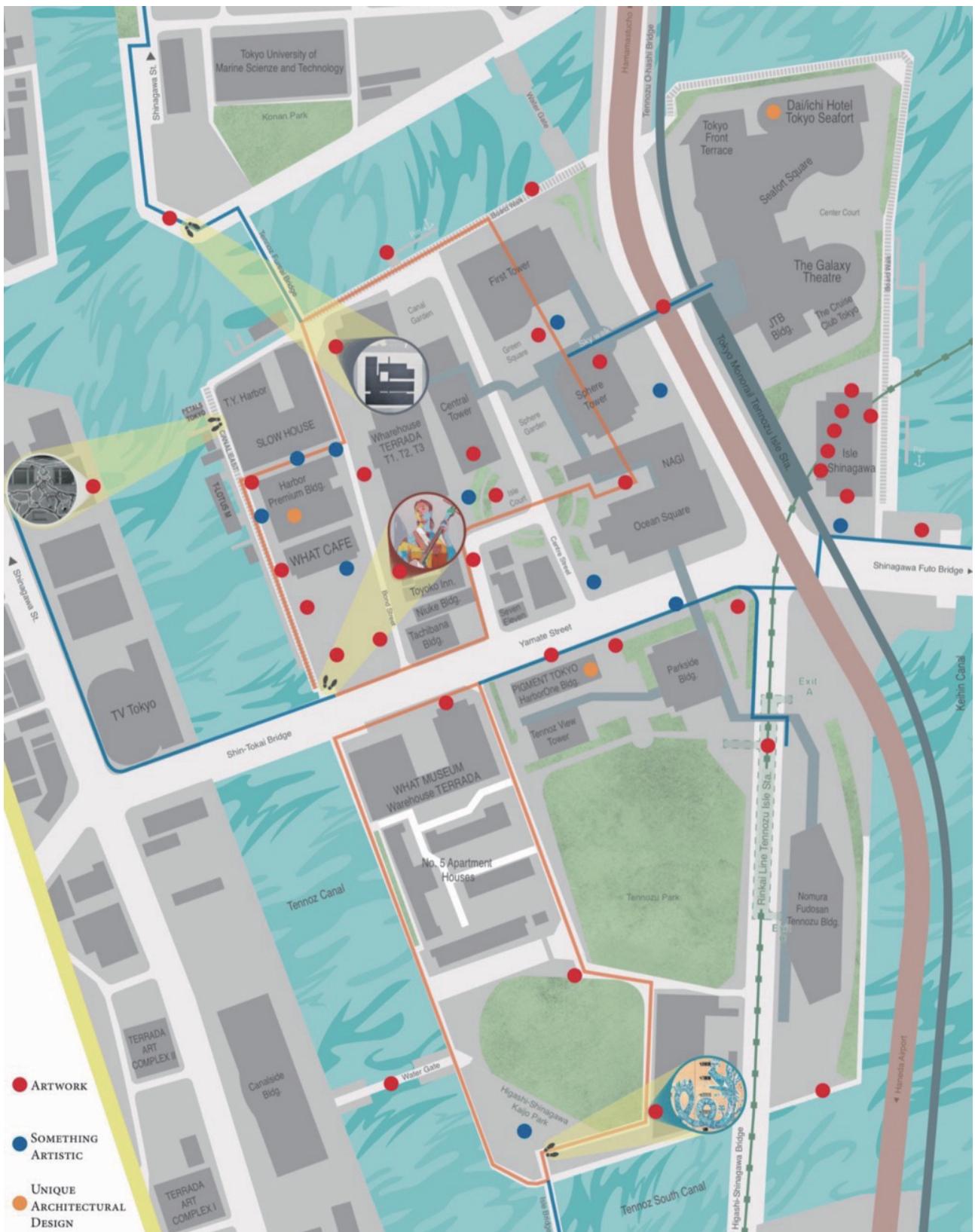
3棟の一階部分のテラスでは、くつろいでいる人が多く、スーパー や チェーン店のテナントが多く入居していることから、近所の住民や通勤している人に親しみのある空間であることが分かった。美術館やアートギャラリーに来る観光客だけではなく、日常をよく感じさせる風景や親水性の高い空間が積極的に作り出されていると考えられる。

最後に、運河沿いの屋外を対象とした現地調査を行った。ここでは現在マンションが開発されて工事中の場所や(図12の紫の部分)、橋近くのボードウォーク出入り口や、運河の上に浮いている船を模した建物が確認できた。また、周辺にはデザイナーズチェアや明らかにデザインされたベンチ、ごみ箱、駐車場パーテーションが設置されているほか、運河にしか設置しない浮遊型の建造物も見られ、意匠性の高いインテリア・エクステリアが見出された。運河という土地の利を生かした都市計画と、現代アートが施されたインテリア・エクステリア・壁画を融合させる街づくりが推進されていることがわかった。

4. マップ

以上の調査を踏まえ、すべてのパブリックアートやデザイン、および特徴的な建築を示した天王洲のアートマップを新たに作成した(図13)。

大壁画については、壁画作品が天王洲の周辺エリアにも影響をもたらす可能性が高いと考え、より広域的な視点、すなわち天王洲の外側のエリアからも作品が楽しめるものとした。また鑑賞ルートの設定には、以下の2点を主に考慮した。まず、パブリックアートは設置場所、テーマともに運河との関係性が強いため、水辺とアート作品を同時に楽しめる場所をできるだけ多く通るルートを考えた。2つ目に、島と外のエリアを繋ぐどの橋から天王洲に入っても、作品巡りを楽しむことができる周遊コースとした。



5. 展望と提案

作成した鑑賞ルートに焦点を当て、実際にそれに沿って天王洲を周遊するフィールドワークを行い、その結果、大きく分けて3つのプロジェクトを考えた。

(1) わかりやすく、気負わずに楽しめるアート作品が多いという特徴を生かし、ワークショップの開催など通じて、地域住民に寄り添ったアートプロジェクトを展開すること。(2) 天王洲に限らず、品川等周辺地域にも作品を設置し、天王洲への動線を作ると共に、周辺エリアを巻き込んだアートのある景観の形成による一帯の「エリアおこし」。(3) 天王洲内でもあまりアートが設置されておらず、効果が期待される場所に新規作品を設置することでより街を活性化させる。

具体的には以下を提案したい。

ファーストタワー、スフィアタワー、オーシャンスクエアの3棟を貫く動線（図14）は、実際に地域住民が通りぬけに利用しており、また北に向かって通り抜けると天王洲らしいボードウォークの景観が広がっている場所もあるため、この場所に作品を設置することは「運河とアートの街」のイメージ強化につながると考えられる。



14|ビル3棟を貫く動線



15|品川駅へ至る道

品川駅へ至る道（図15）について、品川駅から天王洲間を楽しく散歩できるルートを整え、天王洲へのさらなる人の呼び込みをねらう。また、品川駅からボードウォークへの入り口箇所がわかりにくい見た目となっているため、ここにも作品を設置することでアートの街の始まりを予感させる。具体的な作品案としては、親水性が高い地域であることを踏まえ、水に関わる作品、またはランニングに使われることを想定し、アートと融合したベンチの設置などが良いと考える。

セントラルタワー付近を囲む円形広場（図16）について、1階ホールで常に展覧会を開いている建物であることからアートとの親和性が高く、作品設置に有益な場であると考えられる。具体的な作品案としては、展覧会では多摩美術大学工芸学科の作品展が行われていることから美術学生の作品や、木の植え込みはあるが花が少ない印象のため「生花」+「花にまつわるアート作品」で華やかさを追加するなどが考えられる。



16|円形広場



17|駐車場に至る道

WHAT MUSEUM から裏の駐車場へ至る道（図 17）については、WHAT MUSEUM を訪れるために天王洲に来た駐車場利用者に対して、「アートの街」の始まりを示す作品設置が有効と考えられる。

6. まとめ

本調査では、天王洲アイルのパブリックアートに焦点を当て、特徴や傾向の分析、建築とパブリックアートの関係性の把握、作品鑑賞ルートの作成、今後のアートプロジェクトに関する展望と提案を行った。

天王洲地域のパブリックアートについて網羅的に調査を行なった結果、ここでは壁を利用した平面作品、および若手アーティストが多く、ストリートアート性や現代性が高いことがわかった。また、具象的なもの、水辺から見えるアート、水や運河をテーマとするサイト・スペシフィックな作品が多いことにより、アートへの関心度が低い人や天王洲外の人にも「運河とアートの街」というイメージを印象付けやすいものになっていると思われた。

天王洲地域の建築に関する包括的な調査では、個人所有の建築は極めて少なく、全ての建物が 1990 年代に建設されていることがわかった。このことと、パブリックアートの分析結果から、「アートになる街 ハートのある街」というスローガンを実現しやすく、さらに、街の歴史と同じ時代のアートを設置されていることが明らかとなった。また、街づくりの観点で天王洲の景観を見ると、オフィスビルの連立するエリアにおける、親水性の高い空間づくりや、デザインされたストリートファニチャー、PETALS TOKYO などの運河を活かした浮遊型の建造物など、地元の人々やオフィスワーカーにとっても「アート」および「運河」を日常で感じることのできる街づくりがなされていることが判明した。

本調査の最終目標として提案した作品鑑賞ルートでは、天王洲を代表する大壁画を見つつ、より多くの作品に触れられるルートを考案した。そこでは都市計画的な視点も鑑みながら、天王洲の内外を問わず周遊を促しやすい点も考慮されている。同時に、ワークショップの開催、品川周辺エリアを巻き込んだアートのある景観の形成、新規作品の設置場所を示すことで、天王洲の未来の展望を掲げている。

【注】

(注 1) 品川区、品川区景観計画【重点地区・天王洲地区】天王洲地区景観まちづくりルール アイデアブック ,2019 年 ,ideabook.pdf (city.shinagawahttps://www.city.shinagawa.tokyo.jp/contentshozon2019/ideabook.pdf.tokyo.jp), (最終閲覧日 : 2024.03.07)

【参考文献】

- (1) 株式会社岡田新一設計事務所 , 日本郵船天王洲ビル 1995,2024 年 ,<https://www.sites.os-a.co.jp/post/%E6%97%A5%E6%9C%AC%E9%83%B5%E8%88%B9%E5%A4%A9%E7%8E%8B%E6%B4%B2%E3%83%93%E3%83%AB-1995>, (最終閲覧日 : 2024.03.07) , (最終閲覧日 : 2024.03.08)
- (2) 一般社団法人工アマネジメント TENNOZ, スフィアタワー天王洲 ,2024 年 ,https://www.e-tennoz.com/areaguidance/bldg_spheretower.html (最終閲覧日 : 2024.03.08)
- (3) 一般社団法人工アマネジメント TENNOZ, 天王洲ファーストタワー ,2024 年 ,https://www.e-tennoz.com/areaguidance/bldg_fast.html , (最終閲覧日 : 2024.03.08)
- (4) 株式会社タイソンズアンドカンパニー ,HISTORY,2024 年 ,<https://www.tysons.jp/brewery/history/>, (最終閲覧日 : 2024.03.08)
- (5) 寺田倉庫株式会社 (Warehouse TERRADA) ,COMPANY PROFILE
会社概要 ,2024 年 ,<https://www.terrada.co.jp/ja/company/>, (最終閲覧日 : 2024.03.08)
- (6) 梓設計 ,Work 実績紹介 ,2024 年 ,<https://www.azusasekki.co.jp/work/view/36>, (最終閲覧日 : 2024.03.08)

【図表の出典】

- (1)(2)(3)(4)(5)(6)(10) 隅田梨奈作成
- (7) (8) 隅田梨奈撮影

(9) 天王洲アートフェスティバル公式ホームページ ,<https://tennoz-art-festival.com>, (最終閲覧日 : 2024.03.19)

(11)(12) 太田万里恵作成

(13) Francisco Abad, Dellacasa 作成

(14)(15)(16)(17) 隅田梨奈撮影

【調査・執筆】

隅田梨奈 Rina Sumida (文化構想 3 年)

高橋雄大 Yudai Takahashi (文化構想 3 年)

佐々木佳音 Kanon Sasaki (文化構想 4 年)

武村希歩 Kiho Takemura (文化構想 4 年)

中島美結 Miyu Nakajima (文化構想 4 年)

太田万里恵 Marie Ota (創造理工修士 1 年)

Francisco Abad, Dellacasa (創造理工修士 1 年)

謝辞 調査にあたり、以下関連の方々にインタビューをさせていただきました。心より感謝申し上げます。

寺田倉庫

Tomio Koyama Gallery

Takuro Someya Contemporary Art

Anomaly

美術×建築 丸の内・街歩きワークショップ
2023 報告書

2024年5月1日

早稲田大学 文化構想学部 複合文化論系
超域文化プログラム 「都市と美術」ゼミ

早稲田大学 創造理工学部建築学科／大学院創造理工学研究科建築学専攻

Art × Architecture

Urban Survey Workshop 2023